
Lonely Planet

スカフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lonely Planet

【Zコード】

Z2256B

【作者名】

スカフイ

【あらすじ】

死んだはずのリュウちゃんがボクの前に現れた。ボクはただ嫌な予感がしていた。＊この作品は『summer visitor』との関連作品です。

000 プロローグ

ザアアアアアアアアアアアアーツ

キキツ

激しく雨の降る中、

「… も悩むん…」

卷之三

ザアアアアアアアアアアアアア

「お姉さん…着てましたよ。起きてトモ。」

۲۷۰

運転手さんが困った顔をして酔つたお客様に声を掛けた。

「着きましたって！1640円になります！」

「……あ……もつ着いたのか。

……つたく……まだ雨止まないのか……こぐらだつけ?」

「1640円になります。」

お姫さんは半分寝ぼけた顔でお札を運転手さんに差し出した。

「……2000円からの預かりで360円のおつづですね…

凄い雨ですから足元滑らない様にね…」

「……せせせ……わかってる…少し酒入つてるとか、
まだまだそこいら辺の若っこ者には負けないぜー。」

ザアアアアアアアアアアアア

ドアが開く。

「あんがど。またいつか…」

お姫さんは鞄を自分の頭の上に乗せ、傘代わりにして走り出しだった。

「……ありがとうございました…」

バタン

タクシーのドアが閉まる。

運転手さんはござ出発しようと前を見た。

「…………ん？」

雨が降りしきる中、奥に人影らしきモノが見えた。

ザアアアアアアアアアアア

「…………あれって…………子供だよ……な？」

運転手さんは田を凝らしながらよく見たが、
やはり子供が奥に立っている様に見える。

「…………なんでこんな雨の中…………」

ザアアアアアアアアアアア

「…………。」

ドンーデンドンー

いきなり助手席の窓を叩く音がしてびっくりする運転手さん。

窓を見るとやられのお姉さんが窓を叩いていた。

「…ひめ…ったくなんだよ…」

ザアアアアアアアアアアアア

ドンーデンーデンー

先ほど降りる時と打つて変わつて険しい表情をしながらしつこく窓を叩いている。

「そんなに叩かなくて…今開けますよ…」

運転手さんはボタンを押し窓を開けた。

「…ビラしたんですか?」

ザアアアアアアアアアア

「…まあ…まあ…」

客の男は息を整えると先ほど来た場所を指しながら口を開いた。

「…………あせこ」子供が……

「…………子供?」

「…………はあつ…………ああ…………入口の横に子供が倒れて……
…………はあつ…………はあつ…………多分…………死んでる…………」

「…………えー?」

運転手さんは『子供』と聞いて、
わざと前方にいた子供の事を思いだし、前を見た。

「…………。」

ザアアアアアアアアアアアツ

だが、そこには誰もいない。

「…………いない…………」

「…………はあつ…………ちよつと運転手さん聞いてる?」

「早く……警察を呼ばないと……はあつ……それと救急車も……はあつ……は

あつ」

お密さんは雨に濡れながらも冷静を装おうとしていたが
見るからに動搖を隠せてない。

それを見た運転手さんは我に返り、

「……あ…ああ。」

携帯をすぐ取り出し電話をした。

「…もしもし。」

ザアアアアアアアアアアアツ

それは凄く雨の降った夜の出来事だった。

「セイイちゃん…」

「セイイちゃんつばー！」

「起きてー。セイイちゃんー。」

「…………ん

その翌日、ボクはママに会い始めたんだ。

「…………なんなママ?…………まだ起きる時間じゃないよ…………ん

「…………からっ!落ち着いて聞いてよ!…………

リュウちゃんが……リュウちゃんが死んじやつたつ!…………

「…………え?」

ボクはゆっくりと身体を起こした。

ママは真剣な顔してボクを見つめ、また言つたんだ。

「…………リュウちゃんが…………

死んじやつたの…………

「…………え?」

「…………ベランダから落ひて死んじやつたの…………ううううううう~つ

ママは田から涙をたくさと零しながらボクを抱きしめた。

「……ココウちゃんが…………死んだ？」

「……そうよ……」

『死んだ』？

……『死ぬ』ってどういう事なんだろ？

ボクはふと、そう思った。

そしてボクはママに抱き着かれながらゆっくりと視線を窓に移した。

「…………。」

窓の向こうが、じつは見ていた。

……ココウちゃんが……。

そして、微笑んでいる。

死んだはずのリュウちゃんが立っていた。

ザアアアアアアアアアア

「セイひきこー遅れひきこーあんねー！」

「マイ遅こよー翻も降つて来るし……」

「いのーん。道混んじやつて……」

今日またママが学校まで迎えてくれた。
普段は送迎バスで帰つてるボクには
少しでもママといれる時間が増えるのは素直に嬉しかった。

ザアアアアアアアアア

「ねえ……ママ……

「…ん? なあ? .」

「あそこ……」

ボクは大きな木があるトコを指差しながら言った。

「……あそこがどうかした……？」

「……見えない？」

「見えないってなにが……？」

ママは首を傾げながらボクを見つめた。

ザアアアアアアアーッ

「…………。」

やつぱり……見えないんだ。

「ひりん。なんでもない。」

「…そ。ホラ早く車に乗つて…」

「…うん。」

ボクは車に身を乗り出した。

バタン。

「……。」

ザアアアアアアアーッ

車が動き出した瞬間、
ボクはまたあの木を見た。

じつとじつち見てる。

あれは間違いなくリュウウちゃんだ。

なんであそこで雨に濡れて立ってるんだわ。

…それよりも…

なんでそこそこいるんだから。

リコウちやん、

一週間前に死んだはずなのに…。

ザアアアアアアアアーツ

「それにしても今日はよく雨降るわね…」

「……うん。確かにこんな大雨だったね…」

「……なにが?」

「リコウちやん…死んだの…」

「…………。」

ママはボクの叫聲で口を開じた。

「……ビル、ベランダから落ちたの？」

「……セイちゃんも知ってるでしょ？
リコウくんは脳に障害があつたか？」

ブウウウウウーン

「だから死んだの？」

「……そりゃ。

きつとリコウくんはベランダから落ちても
死ぬとは思わなかつたんでしょうな……」

「…………。」

『死ぬとは思わなかつた』？

『死ぬ』とはナンだろ？

ボクはママを見つめた。

ザアアアアアアアアーツ

「死ぬつてどういつ事…？」

「天国に行つちゃうつて事よ。
肉体が滅びるというか…
あゝ子供に言つてもわからんないか…。」
』

…わかるモン。

わかるけど…

ザアアアアアアアアーツ

「天国に行けない人つている?」

「地獄に行く人?」

「……ううん。地獄にも行けない人、……」

「なに、それ？」

「……だから……ずっとここにいる人。」

「幽霊って事?……ああ……ママ見えないからねえ……」

ブウウウウウウーン

「ねえ……ママ……リュウちゃんって……」

「セイちゃん!…もうリュウくんの話はやめて。
それにリュウくんのお父さん、お母さんの前では
リュウくんの話はあまり話しないで……」

「……え?」

「だつて思い出したらまた悲しくなるでしょ?……?」

「…悲しい？」

「…寂しくて悲しくなるのよ。」

「寂しくて？」

ザアアアアアアアーツ

…わざわざ濡れていったリコちゃんも寂しそうだったな…

…でも嘘つ

ママもカン違にしてる。

リュウちゃんは確かに死んじやつた。

でも……そこにはいる。

そこにはいるんだ。

寂しいだけじゃなく、

悲しくて……

……哀しくて……

ザアアアアアアアアア

「セイ……ちやん? どうしたの? 静かだね……」

黙るボクに不安を感じたのか、ボクを見つめていた。

「……ママ……前……」

「え？」

ママが前を向くと、

雨が降りしきる道路の奥に小さな子供が立っていた。

「 ももひ。 」

驚いたママが思いつきましたブレーキを踏むと、

車は叫び声のような音を立てて停まつた。

キイイイイイイイイーッ！—

…あれはコウツちゃんだ！

「 キヤアアアアア - ツ 」

笑ってる。

リュウちゃんが笑ってる。

楽しそうに笑いつつ、リュウちゃんはまだ不気味だった。

「…ケケケ…」

001 リュウ セイ（後書き）

お久しぶりです！
よかつたら感想ください！
励みになります！

002 アメ ヤム マタ フル

「…奥さん…大丈夫ですか？」

「あ、はい。」

「ま・幸いケガ人はいないし…車もキズ一つない。
ラッキーな事故でしたね。」

「あの、ホントにケガ人はいないんですか？」

「ええ。子供を轢いたみたいな事言つてましたよね?
でも目撃した人達によると最初から誰もいなかつたみたいですよ。
奥さんが急にブレーキを踏まれた…と。」

「そんな!だつてはつきりと…」

「さつきまで大雨でしたからねー。そのせいじゃないですか?」

「…? ホントに誰もいなかつたんですね?」

「ええ。奥さんの見間違いですよ。」

警察の人気がそつまつとママは凄くほほとした表情をして

「ナニですか。」

「…もう行つていいですよ。」

「はい。どうお騒がせしました。」

車で道路を走つていたら目の前に突然、リュウちゃんが現れた。
ママはびっくりして急ブレーキを踏んだんだけど、
それが間に合わずリュウちゃんを轢いた気がした。

でもリュウちゃんは幽霊だ。

そんな事をしても死ぬはずがない。

だつて死んでるからね！

ママはよくわかつてないみたいだ。

ボクは車の助手席でママがこちらへ歩いて来るのを見て安心した。

ガチャッ

バタン。

「セイひちさん、車で待たして…」

「…うひ。」

「帰るうか。」

「うん。」

ブウウウウウウーン

「…………。」

「警察の人はなんて？」

「ママの見間違いつて。最初から子供なんていなかつたって。」

「…………。」

「西のせいかな？きつとママが見間違えたのね…」

ブウカウカウカウーッ

「……こたよ。」

「えー?」

ブウカウカウカウーン

「……いたつて……子供が?」

ママは運転しながらボクの顔を見た。
ボクはママを見つめ返すと冷静に

「うふ、うふ。リュウちゃんが。」

「……セイちゃん、ママも子供には見えたけど、
リュウくんには見えなかつた。
だってリュウくんは亡くなつたのよ?
いのワケないじやない。」

ママは前回を遠え少しキシイ口調で言った。

「……そうだね。なんでボクには見えるんだろ？。」

「…………。」

「ボク……あんな顔初めてみたよ。」

「あんな顔？」

「わつわ……リュウちゃんが車の前に立つてた時……笑つてた。」

「…………。」

「ボク……リュウちゃんが笑つてるトコあまり見た事ないよ……」

「確かにリュウくんは笑わない子だつたわ。
だからさつきのはリュウくんじゃないね。
笑つてたからね……」

ママは優しくボクに言いきかす、
わつきの子供がリュウちゃんだって認めたくないんだりつ。

「——ママ、ボクの話信じないんだね？」

「…だつて…幽靈なんて信じられないもの。
わざと寂しい心が作り出した幻よ。」

「寂しい心?」

「もう。」

セイウチヤンはコウくんが亡くなつて寂しいのよ。
だから見えるのよ。」

「…そつか。」

ボクは移り変わる窓の景色を眺めた。

ブウカウカウカーン

車はボクん家があるマンションへと着いた。

バタン。

「ふう。ママ疲れちゃった。」

ママは家に着くなりソファに体重を預けた。

「ボク、先にフロ入つていい?」

「そうね。セイちゃん少し濡れてるから。」

ボクは着替えを取りに自分の部屋へと入る。

ガチャツ。

今日は朝から雨模様なので電気をつけないと部屋は真っ暗だった。

カチッ。

薄ぐらい部屋が明るくなる。

ボクはゆっくりと窓を見る。

雨止んだばかりの雨はまたシットシットと降り始めていた。

「……。」

ボクは窓に近づき、外の景色をながめる。

そして、この窓からは隣の家のベランダが見える。
そのベランダにはいくつかの花が置いてあって
リュウちゃんはよく、花に水をやつていた。

そう、隣はリュウちゃんの家で、

リュウちゃんはここ6階のベランダから落ちたのだ。

ボクは考える。

ここから下に落ちる瞬間、

リュウちゃんとは何を思い、

感じたのだろうか…と。

そして、人は死んだらどうなるんだろうか…と。

003 フンスイ

ボクはタンスから洋服を取り、風呂場へ向かう。

スタスタスタ。

その途中、

ママがキッチンで何かを作ってる姿が見えたが何も言わず歩いた。

ガチャツ

バタン。

ドアを閉めると田の前に洗面台と鏡があつて
そこに自分の姿が映し出されていた。

「……。」

ボクはじみじく眺めていたが、どうでも良くなつて服を脱ぎ始めた。
全部脱ぎ終わると風呂場のドアをゆっくりと開けた。

モワッ…

白い湿気混じりの煙がボクを包む。
そのお陰で視界は真っ白になった。

まるで雲の世界みたいに。

カタツ

中に入るとママが用意していたのか、
湯舟にたくさんのお湯が入っていた。

ボクはそれを確認すると蛇口をひねり、シャワーからお湯を出す。
いつもシャワーは最初は冷たい水が出るので
自分の反対側に向けて勢いよく噴射させる。

シャアアアアア。

それを眺めていると昔の事を思い出した。

シャアアアアアアアア

あれはいつだつたつけ…？

シャアアアアアアアーツ

リュウちゃんと公園で水遊びをしたんだ。

噴水のある公園で

リュウちゃんは基本的にあまりしゃべらないから、
ずっとボクの横でウロウロしてるだけだった。

ボクは砂場で夢中になって山を作り、
それにトンネルを作る作業に追われていたんだ。
結構時間がかったと思う。

「出来たっ…！」

ボクはやっとトンネルが開通したので思わず大声で喜びを表現した。
もちろん、それをリュウちゃんにも見せたくて後ろを振り返る。

「ココウカちゃん見てー。」

だが、リコウカちゃんは後ろにないなかつた。
後ろどころか、右、左、前にも姿はない。

「…ココウカちゃん…？」

ボクは体を…視界を…360°廻す。

だが、セレーナはココウカちゃんの姿は見当たらなかつた。

「ココウカちゃん…どうへ。」

ボクは必死になつて探した。

「…ココウカちゃん…。」

その時

リコウカちゃんのママヒ『しつかり見てね…』
と、念を押された風景が何回も頭を過ぎつた。

タツタツタツタツ

「まあ…まあ…」

ボクは一生懸命走った。
住宅街にある公園だからそんなに大きくなはないけど、
小さいボクには広く感じた。
もしかしたら…その時だけだつたかも知れない。

「…まあ…まあ…」

どんなに走っても走ってもリュウちゃんには追いつけなかった。

「…リュウちゃん…」

ボクは泣き声になつた。

泣き声になつて呪を止めると声が聞こえた。

その声がリュウちゃんの声だとすぐにわかつた。

そして奥にある噴水の前にリュウちゃんの姿があつた。
ボクはリュウちゃんに歩み寄った。

「みて……」

リュウちゃんはボクを見るなり、
噴水の中の水を指差しながら言った。

「……はあつ……はあつ

ボクはリュウちゃんを見つけた安心感でいっぱいになり、
また泣きたくなつた。

「見て。」

リュウちゃんがまた言つので、
ボクはリュウちゃんの言われるまま噴水の水を見た。

そこには自分の顔が映つてゐるのが見えた。
噴水の水が落ちて来る振動で水面が揺れ、
映つている自分の顔が歪む。

リュウちゃんはそれを不思議そつに見ていたのだ。

「見て……面白い……」

リコウちゃんをは楽しめ!』ポツリと呟つた。
だけどボクはリコウちゃんを探すのに疲れ、

「…リコウちゃん…もひ帰らつか…」

と、溜息混じりに呟つた。

さつきあんなに一生懸命に作った『山のトンネル』の事も
ボクの頭にはもう無かったのだ。

バシャッ

リコウちゃんが笑いながらボクに水をかけた。
ムカついたボクはすぐにやり返す。

「あー…やつたなあー」

バシャッシャッ。

するといリコウちゃんもまたやり返す。

バシャッ。

「あはっ」

ジャババジャ。

「あっ……せったなあー。」

バシャシャシャ。ヤ。

メビウスの輪のようにそれを繰り返すと、雨でも降ったかのよう二人ともビショビショになつた。

まひる、家に帰れ、ママがまだおひさしひつされ、怒られた。

シャアアアアアアアア

「…………。」

あの時のココウへとはまだマシだった。
まだ普通だった。

あの事やえなければ……。

004 オキニイリ ノ バシヨ

ボクはポンプからシャンプーを数量手に取り、頭を洗う。
もちろん田に入るときの目を閉じる。

「……。」

「ある田、

リュウちゃんが突然、いなくなつた。

リュウちゃんのママは必死に探していたけど、
ボクには何となく何処にいるかすぐにわかつた。

ボクは急いでその場所へと向かった。

例の噴水のある場所。

あれ以来、

リュウちゃんにとってはお気に入りの場所だった。

「はあ…はあ…」

そして、その場所が見えてきた。

「…やつぱついた…」

リュウちゃんは噴水の水の中を相変わらず覗き込んでいた。

「ココウちゃん…」

大声でリュウちゃんを呼んだ。

その時…

ドボン！

「…………え？」

リコウちゃんはボクの声にびっくりして水の中に落ちたのだ。

「あーー！ あーー！」

“バジャッバジャッ”

リコウちゃんは手足をバタバタさせ、溺れていた。

「…………。」

「あ～う…ぐいもんぐいもん」

“ジャバジャバジャバ”

「…ぐいもんぐいもん」

“バジヤツバジヤツバジヤ”ボツ、ボボツ

…ボクはウンザつしていった。

「…まあ。」

ボクのあとを楽しむにっこりへんなコトウがいた。

ボクがいなけりや何も出来ないリコウウがやん!」。

今だつてホラ、足がついてない場所で溺れているじゃないか。

何せつてんだよ。

「あ～！ あ～！」

“バジャジャボビヤツビチャツビチャ”

リュウちゃんは手足を微妙な感覚でバタバタさせ、
目は必死に助けを求めていた。

- ボクを見ていた。

「…………。」

それでもボクは動かなかつた。

「あ～……あ……」

“バジヤッボジヤッジャ

バジヤバ　バジヤ　ジヤ　”

「ああつ　あ　'フ　フ　」

“……チヤボツ……”

「……」

“……。 ”

しづらへると、何も聞こえなくなつた。

リコウひやんの声も

水の音も。

「.....。

ボクはゆっくりと後ろに振り返る。

そして、家に向かって歩き出した。

その間、何だか無性におかしくなつて笑いを堪えきれなくなつた。

「……………く

「……………くふふ

ボクは両手で口を押され、急いで歩く。

あのリュウちゃんから解放される事は
こんなに身が軽くなるのか、今にも叫びたかった。

「セイウチさんー！」

後ろでココウべつのお姉さんの声が聞こえた。

「……………。」

ボクはゆうべつと後を振り返った。

「ねえー。リュウがどこにいるかわからない?
セイちゃんならわかるはずよ……。」

「…………。」

「ホントは知ってるんじゃない?」

「…………。」

「ねえー! 知ってるなら教えてー!」

「……知らない。」

ボクが強くしゃつぱつとココロつかやんのママは肩を落として、

「…………そう。わかった、ありがとう。」

トボトボとまた何処かへ探しに行つた。

「…………。」

「…………くつ」

「…………くふふ……」

ボクは急いで家に帰り、自分の部屋へ入るなり笑つた。

「あはははははは……」

何故か凄く気持ち良かつたから。

開放感がボクを腹の底から笑いをくれたのだ。

「あーはははははははは

- それから数分後、リュウちゃんは噴水で発見された。

命は助かつたが、更に障害を悪化させた。

あつとリュウちゃんはボクを許せないんだ。

ボクに復讐して殺すつもりなんだ。

だからホラ、死んだ後もボクにくつづいてるじゃないか。

シャアアアアアアアア

「…気付けば、ずっとシャンプーで頭を洗っていた。

ボクはシャワーを手探しで探す。

「…え〜と…」

田を開じてるので見えない。

ガシツ！

その瞬間、誰かがボクの腕を掴んだ。

「…！」

ボクは恐る恐る田を開けた。

視界には笑っている口が目に入る。

リュウちゃん?

そう思った時、その口が大きく開いた。

シャアアアアアアアア

「……。」

目の前には
口を開けているリュウちゃんがいた。

ボクは動けなかつた。

シャアアアアアアアーッ

その頃、キッチンにいたママは
いつもより風呂が長いボクを心配し始めていた。

「風呂^{風呂}にわね。どうしたのかしら？」

「」

「セイちゃん…大丈夫？ ねえ…！」

「……。」

「」

「聞^きいてるー？」

「……。」

返事のないボクにママは不安になり、
ドアノブに手をつける。

シャアアアアアアアアア

「セイちゃん?」

ドアを開けた。

ガチャツ。

シャアアアアアアアア

「…………。」

中からは湯気とシャワーの音だけが響いてる。

「セイちゃん!」

そしてママの畳には湯舟に浮かんでるボクが目に入った。

「ああ、うーん……」

「うーん……うーん……」

ママはボクの身体を湯舟から持ち上げる。

「うーん……うーん……」

「……ママ……」

「……せむりーっ。」

「うーん……ボクじやなこと……」

「やひーとー。」

ママは風呂場の端っこに座っているボクを見て驚く。

「……え？…じゃあ…」

ママはゆっくりと抱きかかえている子供を見下す。

「…………」

抱き抱えてる子供を見てびっくりした。

「…………ひつ」

ママは笑つてこむリュウちゃんがいた。

「 わわあああーーー！」

ママは叫びながらリュウちゃんを放した。

その勢いでリュウちゃんは頭から落ち、鈍い音が風呂場に響いた。

「！」

「…………。」

シャアアアアアアアア

ボクもママもリコウちゃんから田が離せなかった。
……といつより動けなかつた。

「…………」

「…………」

「……いタイよオ」

リコウちゃんは頭を押されながら泣き止んでいた。

「セイちゃんー！早く立つてー。」

ママは動けないボクの身体を掴み言つた。

「……うん……」

ボクはゆっくりと立ち上がり、
ママに引っ張られながら風呂場から出ようとしました。

シャアアアアアアア

ガシッ。

リュウちゃんがボクの足を掴む。

「…あのトキモタスけてくれなかッたね…」

「……今の……リュウちゃんだったよね？」

「…………。」

「まあ……まあ……

ママは勢いよくボクを引っ張ると
リュウちゃんの手はボクの足から離れ、
リュウちゃんの言葉を聞く暇もなく、ボクは風呂場から出た。
バタン。

「ヤイハセ甲へー。」

「……え？」

ママはボクに確認するまでは言った。

「うん。」

ボクは冷静に返事をした。

「……なんで? だつてリュウちゃんは
ベランダから落ちて……ううん……だつてお葬式だつてしたし……
火葬もして……あるはずがないわ……リュウちゃんの肉体は……」

ママは必死に頭を整理しようとしていた。

ボクは濡れた身体のままだったのですぐ寒かった。

「……ママ……寒い……」

「あ、ごめん。今タオル持つてくる。」

ママが立ち上がりうとした時、ドアの向こうから音がした。

ガチャ ガチャ

「……！」

ドアのノブが右や左に動いている。

「ダメ！」

ママはノブが回り切らないように手で固定した。

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

「……ひい」

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

ボクは何故か冷静だつた。

必死でドアを押さえてるママを見ても恐怖はなかつた。

「…アケテ…」

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

「…あけて…」

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

ドアの向こうから声がする。

「アケテ…」

ココからこの寂しそうな声がずっと止まらなかつた。

「…………。」

じぱりくママはママのノブにしがみついていたが、
反対側からリコウひやんが開ける気配はもう感じられなくなっていた。

「……まあ……まあ……」

ザアアアアアアアーッ

歛はますます強くなり音が激しくなった。

ボクは癪さに耐え切れず、部屋へと歩き出す。

「セイちゃん！勝手にあまり動かないでっ！…」

ママがボクを呼び止めるが、
寒いのが苦手なボクはそんな良い子で居られなかつた。

「大丈夫だよ！」

ママを無視して部屋へ向かうボク。

「セイちゃん！』

ガチャッ

ドアを開けると部屋は湿氣でジメジメしていた。

「…あ。」

タンスの横の窓のカーテンがかすかに揺れている。

「……？」

いつの間に窓が？

とは思つたが、気にせずニタンスへ向かつた。

タツタツタツタツ

カタツ。

タンスからパンツ、ズボン、シャツ…を取り出し、着る。
ボクはすぐに窓を閉めようと窓に近づくと隣のベランダが田に入る。

リコウちゃんのママが用事から帰つて来たばかりなのか、
慌てて洗濯物を入れていた。

「…………。」

「セイウちゃんー！」

背後からのママの声にボクはびっくりした。

「もうー！アンタはなんで勝手に動くのー。
そういうことをなきなこつて言つたでしょ！」ー？」

「だつて寒かつたんだもん！」

「もうー…連れて行かれたのかと思つた。」

「え？ボクがリュウちゃん？」

「セウヨー。コロウへんなよアンタしか友達いないでしょ！」

そう言ひてママはボクを抱き締めた。

「…………。」

リュウちゃんは

ボクを友達と思つてないよ。

だって

ボクも友達と思つてないもの。

でもママには、ボクがリュウちゃんに殺されても、
『友達』だから寂しくて
一緒に天国に行かれたと思うんだろうな……。

リュウちゃんがボクを怨んでるなんて
思つてもいられないんだろうな……。

「大丈夫よ……セイちゃん。」

ママが守つてあげる。だから心配しないで……」

「…………。」

ママはギュッとボクを抱き締める。

それが気持ち良くて……ボクはふと目を開じる。

「…………ママ……」

「…ん?」

「…の事はコウカべとのパパとママでわなこですね…」

「…え? なんで?」

マイナサウンドした田でボクを見る。

「…絶対…言わないで

ボクは冷静に強く言った。

「…わかった

今は…言わないでおく。

「…うん。」

ボクはニコニと笑ってママを抱きついた。
ママはボクの髪をやさしく撫でた。

やつべつとまた田を開じる。

…もしかしたら…

ボクが作り出したかもしれない。

リュウちゃんはとうくに死んでて
ボクが『黄泉がえらした』かもしれない。

…だから…神様…

ボクが目を開けるまでにリュウちゃんを天国に帰して下さい。

リュウちゃんにやった事は反省します。

…だから…

…だから…

リコウを天国に帰して貰おう。

ボクは祈りながら眠りについた。

夜中。

…かすかに音が聞こえる。

あれはママがパソコンを打つ音だ。

パパが死んでからママはボクの為に仕事をしている。
きっともう…真夜中だ…
なのママがずっと仕事している。

お疲れ様

ママ。
ママ。

現実と夢の区別がつかないボクは嘔吐でやつった。

「ママ大好き。」

翌朝。

嘘のように天気は晴れていた。

あまりの眩しさでいつもより早く目が覚め、ママに褒められた。

今日はいい日になりそう……なんて勝手に思つたりもした。

「じゃっ…行つてくる…」

「ホントに今日…学校休まなくとも大丈夫なの…？昨日の事もあるし…」

心配そうにママに、「ボクは笑顔で、

「大丈夫だつて！」

「いい！？リュウくんが学校に現れたら逃げるのよ…」

「ひー！隣のリュウくんのパパとママ」聞こえりやつよー。じゃあ行つてきますー！」

「元気なボクにママは逆に不安そうに見送った。

ボクは玄関から飛び出し、
エレベーターへと向かおつとした瞬間

ガチャツ

隣の家のドアが開いた。

「 ーーー 」

ぬう

…とリュウちゃんのパパが出て來た。

リュウちゃんのパパはボクを見てニタアと笑い、

「 おはよ… 」

と、挨拶してきた。

「 お… おはよウイーリー ます。 」

ボクはそのまま走った。

昔から苦手なんだ……リコウちゃんのパパ。

それはきっと……ボクにパパがいなさいなのだひつ……。

「はあ……はあ……」

ボクはHレベーターを使わず、階段で下まで降りて行った。

その頃、ママは家でパソコンをこじついていた。

「仕事ではなく、リコウちゃんの件で……

「やだ。」「こんなにあるの……？」
「靈能者のサイド……。迷うな……」

ママはここに靈能者を呼んでリュウちゃんを成仏させつゝもりだ。リュウちゃんの幽霊を見たのは今でも半信半疑だらうけど、きっと何もしないよりはマシと考えたんだろ。

「…………」

ボクはやつと一緒に着ぐ。

その時、エレベーターの開く音が聞こえた。

ピンポン

ボクはエレベーターを見る。

ドアがゆっくりと開き、リュウちゃんのパパが立っていた。

ボクはまた走り出す。

タツタツタツタツ

ドンッ！

「うわっー！」

「わやっー！」

ボクは誰かとぶつかった。

「「めんなさい…大丈夫ですか？」

「…う…うん。」

カツ カツ カツ カツ

リュウちゃんのパパの足音に怯えたボクは、

「ホントにごめんなさい！」

ボク急いでいるので失礼します。

「えー？…あ・ちょっと…」

タツタツタツ…

ボクは後ろを振り返ることなく、そのままダッシュした。

「…もう一冊帳落としてるの…気付いてないわ。」

「大丈夫ですか？」

「あ・ハイ。」

「おや、」の手帳は…？」

「……あ……せつも、ぶつかって来た子が落としたみたいで…」

「うちの隣に住んでる男の子のだよ。
自分が届けてあげましょつか？」

「…………。」

「……？ なにか？」

「……え、いいです。

わたしもここ4階に用があるんで…
ついでに渡して来ます。

どうぞ、わたしに気遣わずお出かけになつて下さい。」

「……ですか…では、失礼します。」

カツ カツ カツ カツ
カツ カツ カツ カツ
カツ カツ カツ カツ
カツ カツ カツ カツ

「.....」

「.....はあ.....はあ.....」

ボクはバス停まで走った。

あと1分以内でバスは来るからリュウちゃんのパパに会う事もない。

「.....あれ！？」

ボクはどうつかで手帳を落としたらしい。

「おかしいな…絶対ポケットに入れたはずなのに…」

ポケットをどんなに探しても見つからない。
考えられるのはさつきぶつかった時だろ？
でも、戻るのもいやだ。

…ブウウウ…

ちょうどバスがやって来た。

ボクは手帳を諦めてそのままバスに乗ることにした。

一方、さつきボクとぶつかった人は
エレベーターの中でボクの手帳を物色していた。

「なになに…ナカニシ…セイイチロウ…？」

「..... 17歳 ..」

「..... 養護学校 ..」

手帳を拾つた女の人はボクの手帳をじっと眺めていた。

「..... 17歳か ..」

ブウウウウウウ～ツ

ボクは毎日バスで学校へ向かっている。
そんなに遠くへ離れてるワケじやにのに毎日バスだ。

正直バスは嫌いだ。

バスといつより…このバスが嫌い。
ちょっとでも騒ぐと先生は怒るし規則がつとおしい。

だから一度バスじゃなく歩いて行つた。

距離的にはそんなに遠くないはずなのに。
全然学校に着けなかつた。

どうしてだろ？

「セイちゃん…」

突然、後ろの座席からボクの名前を呼ぶ声がある。
その声に聞き覚えがあった。
ボクは固まつた。

「ココロちゃん？」

「…決して後ろを振り向かないでね…」

「…う・うん」

「振り向いたら君は…死ぬ…よ…？」

「…絶対、振り向かないよ！神に誓つて！」

「…ふつ。『神様』なんていないよ、セイちゃん。
いたら、ボクら『障害者』なんて存在しないだろ？」

「……。」

「…そんな事より、君のママだよ。」

「ママが何か？」

「ボクを成仏させる為に…」

「靈能者をパソコンで探してるんだ。」

「…………リュウちゃん…君は死んだんだ。」

「君はここにいちゃいけないんだ…ママがそう言つてた。」「大人は嘘つきだ！」

「君は大人の言う事なら何でも信じちゃうのかい？大人は嘘つきだ！…それにボクにはやらないと云つてた。」

「なにを？」

「決まってるだろ…君を監視する事さー。」

「ボクを…？」

「そりゃ。だってボクら友達だよね？」

「何のために……？」

「……今にわかるよ。」

「…………。」

「だから君からもアマに言つてもうべないかな？
今は探せつとこつて……」

「君は…ホントにユウカくん？」

「なんでもんな事聞くの？」

「……だつてユウカくんは…そんなに疊らないもん…
もつと無口な方だよ！君は…偽物だつ…
リュウくんを利用してこらつ…」

ボクは我慢できず大声で叫んだ。
するとバスに乗ってるみんながボクを見る。

「どうしたの？セイくん…？」

このバスは養護学校の送迎バスなので先生が一人いつもいる。その先生がボクを心配そうに声を掛けて来た。

「…何でもない。」

「何でもないワケないでしょ？…あんな大きな声出して…」

「恐い夢見たんです」

「…まあ。」

先生はボクの頭を優しく撫でた。

すると突然、前に居た女の子がボクを指差し、

「ウソよ！起きてたよ！わたし見てたモン！
後ろを振り向くとか振り向かないとか…」

余計な事を言い出した。

「後ろ？後ろに誰がいたの？」

先生は後ろの席を見る。

「…誰もいないわよ。見てみなさい。」

「…えー?」

れつせりコウカちやんが言つてた。
後ろを振り向いたら死ぬつて!

「誰もいないって事を自分の目で見なさい」

「……いやだ。」

「どうして? ホラ見てみなさいよ。誰もいないのよ~。」

「……見れない。」

「…どうして?」

先生は優しい声で聞いて来る。

でも、答えられるわけないじゃないか。
リュウちゃんが言つてたなんて…。

「…だつて見たら…」

「見たら?」

「あ～じれつたい！」

前にいた女の子が突然先生を払いのけ、
ボクの体を掴み無理矢理後ろを向かせた。

グイッ

「あっ…」

ボクは無理矢理向かされたのでひねられた腰が痛かった。
そして後ろには誰も座って無かった。

「誰もいないでしょ？ばあ～か！」

「萌ちゃん…乱暴はいけません…」

「だつてトロいモン！年上のクセに…」

「……。」

ボクは後ろを見てしまった。

するとボクを振り向かせた女の子が耳元で囁いた。

「振り向くなつて言つたのに…死ぬよ?」

「え?」

「ふり向いたら死ぬよ……？」

「えー？」

「萌ちゃん一席について！」

先生が注意すると、

萌ちゃんはハッとしたような顔をして周りをキョロキョロした。

「…………アレー？わたし何やってたの？」

「もう何ワケわかんない事言つてるのーほら、座つて」

「…………？」

ボクは萌ちゃんの体にコロツキやんが乗り移ったんだと考えた。

萌ちゃんは自分が何やつてたのか全然気づこいよつだ。

「…………。」

萌ちゃんは前の座席に戻った。

だが、後ろを振り返りボクを見ると何故かニヤリと笑つた。

ブウウウウウウーッ…

バスは学校へと走り出す。

カタ カタ カタ

「…なんかみんなピンと来ないわね。」

ママは霊能者サイトを見てるがなかなかこれといったのが見つからない。

アレがリュウちゃんじゃないとしても幽靈らしきモノには違いない。
そう判断してサイトを探しまくっていた。

「……うへん。」

ピンポーン

「……はあ～い。」

ガチャツ。

「……どうも。」

ママがドアを開けるとそこには男の人人が立っていた。
年齢はやや若く、とても頭良さそうな顔つきだ。
一瞬、押し売りやどこかの営業かと思ったが、
どちらにも当てはまらない雰囲気だった。

「……？」

「突然ですいませんが、最近変わった事ございませんか？」

「…え…？」

「…超常現象みたいなものです。」

一瞬、何を言つてゐるのかわからなかつたが、少し考え、口を開いた。

「…それって…幽霊とか？」

「…そうです！何か心当たりは？」

「はあ…まあ…」

さつきまでその関連サイトを見てただけに、何ともいえない感じでママは返事をする。

その顔を見た男は胸ポケットから名刺を差し出した。

「あ・失礼。わたくしこういうものですが…」

「……超常現象研究家……ですか？」

「そうですね。何となくお宅のドアから妙な気配を感じるんですね……」

「うちからですか……？今も？」

「はい少し。誰か家族はいますか？」

「ええ。息子が一人。」

「もしかすると息子さんに憑いて行ってるかも知れません。」

「……うーーーあの子は無事なんですか？」

「さあ。学校に行かれたんですか？」

「ええ。ちよつと電話で確認して来ます！」

ママは急いで学校に電話をかける。
男は家中をジーッと眺めていた。

「着きましたよー。ゆっくり降りてね」

先生がいつも通りみんな席から立ち上がり降りる準備をし、
前の席からみんな降りていく。

バスはいつもの時間に学校へ到着した。

「…………」

萌ちゃんはずつとボクの顔を見ている。

「何でボクを見るの？」

「… もや はははー。」

萌ちゃんは突然、笑い出した。

「何がおかしいの？」

「もやはははは…」

「……………」

ボクは黙つたままバスを降りようと席を立つた。

「ダメ！あたしが先に降りるのー。」

そう言つて萌ちゃんはボクをド突き、先に降りる。

「……………」

ムカついたけど、意味がわからない。

「セイくん！何してるので早く降りなさい。」

気付けばボクだけバスに残つてた。

「先生ー！」

外から声がすると
先生はバスから降りた。

「…なにー？」

ボクも先生の後をついて行くように降りようとしたその時、ドアが
閉まつた。

バタン。

「……！」

ボクはドアを見てキヨトンとする。

ゆつくり後ろを振り返ると運転手さんがじつめを見ていた。

「なんで閉めるんですか…？」

ボクがそつ聞くと運転手さんは答えた。

「…なんでかな？」

ボクはいやな予感がした。

010 キョウジ

「ボクを降ろして…」

「……降りや。だから怖がる事はない…」

「怖がつてないよー。ボクは知ってるよー。
運転手さんにリュウちゃんが乗り移ってるんだろ?
ボクを騙そつたってそつは行かないぞー!」

「……なるほどね。」

運転手さんは一ニヤッと笑つとドアを開けた。

ガチャツ。

「…………！」

「せつせと降りな。先生が来るぜ。」

「…………。」

ボクは恐かつたので
すぐに降りた。

ダツダツダツダツ

そして教室へ走り出す。

その途中、ボクを見つけた先生が、

「……あ・セイくん・ママから電話。」

…と、ボクに言った。

「はい」

ボクは先生の後に付いて行くと受話器を渡された。

「もしもし!?

セイちゃん？無事なの？』

「へん... あつたの?」

『今…家に幽霊に詳しい人が来てるんだけど…もしかしたらセイちゃんについて行つたんじゃないかなって…』

ボクはその言葉に納得する。

「…………うん……そつかも。」

でも最近からずっとボクの傍にいるし……ボクなら大丈夫だよ。」

冷静に受け止めてるボクにママは不安を露せない。

『……やつぱり本物の幽霊なのかしら?
リュウくんはまだ成仏してないのね。』

「わからない。」

「だってボクもおかしいもの……まともな人間じゃないから。」

『……セイちゃん……そんな事言わないで……ママ悲しい。』

「なんで?」

『……とにかく!何かあつたら…………ガチャーンー!』

「あ。」

電話を切られた。

ママではなく、萌けちゃん

「いつまで電話しててるの？年上のクセに…」
みんな教室で待ってるんだからね！」

「年上は関係ないだろ…」もつ

「ママがいないと何も出来ないクセに…」

やつ言いついでちひかさんは走り出した。

「あ…待つてよー。」

ボクは必死に萌ちゃんを追い掛けた。
だが、萌ちゃんは足が早くすぐに見えなくなつた。

そして教室の入口が見え、ボクはドアを開けた。

ガラララ…

バフッ。

ドアを開けた途端、ボクの頭に何かが当たった。
そして白い粉の様なものがいっせいに現れた。
その粉はボクの気管を苦しめた。

「……」「ホッ」「ホッ」……「ホホホ！」

「……ふふ。」

「クスクス」

上から落ちてきたモノは黒板消しだった。
その光景を楽しんでる皆の声が聞こえる。

「……」「ホッ」「ホッ」つづおー！

ボクがむせてると、萌ちゃんが近づいてきた。

「それくらこ氣付けよー一年上のクセこーばあーか！」

「クスス」

「あやせー

萌ちゃんの一言にみんな騒ぎ出す。
ボクは涙が出た。
咳が止まらない。

「 ハホッ！ ハホッ！ ハホッ！」

「 … やイちゃん！

あなたはこの先まともに生きていけるのかな…？

萌ちゃんがニヤけながら叫ぶ。
ボクは萌ちゃんを見つめた。

- 彼女にっこりかわんがいるのだらつか?

「 萌ちゃんー、あなた何て事するのー…？」

先生が窓から顔を出しながら叫ぶ。

「 ハホッ！ … 先生…」

先生はゆっくりボクに近づいてくる。

「…」

「…」

「グニ…グニ」

「ああつー

ボクは叫んだ。

先生は何故かボクを踏んだのだ。

「こんな『ヨミ』を教室に入れちゃマズイでしょー。」

—そう言つたのだ。

「…先生!？」

すると萌ちゃんが笑い出す。

「 もやもや…」

先生も笑う。

「 つふふ…」

そしてみんなが笑い出す。

「 あははは…」

ボクは畠然とした。

そして気付いたのだ。

この教室にいるのはみんなリュウちゃんだと。

そしてそこで目が覚めた。

「 あれ?」

「 セイちゃん!今は授業中よ?
寝てはいけません!」

「 え?」

いつの間にか教室で寝ていた。

ボクはワケがわからず周りを見渡すと、みんながボクを見ていた。

「……。」

一体何処からが夢で、現実なんだろ？

ボクはただボッとしていた。

「息子は無事だそうです。

早退する様に言つた方が良かつたですか？」

ママはその得意の知れない人に真剣にそう言つた。

「……いや……実はわたくし、

これから行かないといけない用事ありますので、

何かあつたらこの名刺に書いてある番号にお電話下さい……。」

男はそつこつて名刺を差し出した。

「ママ丁寧にそれを受け取ると返事をした。

「はい」

「では……失礼します。」

バタン。

「…………。」

ママはパソコンに向かいながら椅子に座る。
そして名刺を見た。

「… うよつと調べてみよつかな？」

「…………。」

ボクは震えていた。

教室のみんなにコウウちゃんが乗り移っているから…。

「セイちゃん！ 今の問題の答えわかる？」

先生が急にボクに質問をして来た。

「…え？」

「… たくさん人の話をちゃんと聞きなさいって言つてゐるでしょ？ -」

先生はボクに怒鳴りつける。

「…ふつ。」

「くすくす」

笑い声が聞こえる。

ボクは声がする方を見た。

そこにリコちゃんがいる様な気がしたから…。

「…………。」

…萌ちゃんと田が合つた。

ニヤリとしたままジッとボクを見ている。

ボクは視線をそらしノートを見つめた。

「…セイちゃん…今の答えは…？」

「…え？」

「また聞いてなかつたの？わざわざつたばかりでしょ」「…」

「…」「めんなせこ」

「やひこね…廊下に立つてなせこ…少しせ返すかのぐれよー。」

そう言つたかと思つと先生はボクの手を引き、廊下へと引っ張り出した。

「いい?」この時間が終わるまで立つていいのよ?
座つたら許さないわよ!」

「……はい。」

ガララ…

ピシヤッ。

「…………。」

ボクは言われるままだ立つていた。

「…………。」

……どれくらい立つていただろうか…

ふと、廊下の奥に人の気配を感じた。

ボクは何故かそこから田が離せなかつた。

「…………。」

ボクはジッとそこを見つめる。

「…………ん？」

薄暗い廊下の奥に手招きをしている手が見えた。

「…………ひつ」

ボクは恐くなつて教室を覗いた。

先生は必死に勉強を教え、みんな真剣に聞いている。
とても邪魔出来ない。

「…………。」

ボクは恐くとも助けを呼ぶ事も出来ない。

助けを呼んだところでもた馬鹿にされるだけだ。

ボクはゆうぐうと廊下の奥に目をやつた。

「…………。」

相変わらず手招きをしている手だけが見える。

ボクはしばらく考え、その手に近づく事を決めた。

あれは…ココウちゃんの手なのだろうか…？

それとも別の手なのだろうか…？

ピンポン

「…せいはい」

パソコンで調べものしていたママは
ゆっくりと玄関に向かいドアを開けた。

ガチャッ。

「……？」

そこには女人が立っていた。

「どうやら様で?」

「…わいつきトで男の子とぶつかつたんですけど…
これを落として行つたんです。」

女性はやつぱり手帳を差し出す。

「…あ・セイちゃんの?すいません、わざわざ…」

「…じゃあ、これで失礼します。」

「ありがとうございました。」

会釈をするとそのまま女性は消えて行つた。
そしてママもドアを閉める。

バタン。

012 タレノテ？

ボクはゆきくつとその手に向かって歩き出した。

「…………。」

スタッフ スタッフ

「…………。」

スタッフ スタッフ

近づいてみると、

その手がリコウウチやんのものではないのがわかる。

(…誰の?)

ボクはいつも思いながら歩くスピードを早めた。

すると、その手はサッと消えて行く。

ボクは更にスピードを増してその手を追い掛け、角を曲がった。

「…………」

角を曲がったそこには

女の人が立っていた。

髪の長い女人。

ボクを寂しそうに見下ろしていた。

「…ひつ…」

ボクはびっくりしてペタンと尻餅をついた。

「…………」

その女人顔は髪で隠れてて全然わからない。
ボクを見ているのかいないのか…。

ボクは恐かつたが、黙つてるのも変なので話掛けた。

「……なんでボクを呼んだの……？」

君もリュウちゃんと同じ幽霊なの？名前は？」

「……。

しばらくの沈黙の後、突然その女の人は身体をモゾモゾと動かし、壁の中に消えて行つた。

「あーねえ……！？」

ボクの呼び止める声もむなしく、女人は出て来なかつた。

「……誰なんだろ？……」

カタツ

どこからか音がした。

ボクは周りをゆっくり見渡す。

「……？」

目の前は階段になつていて
上から聞こえたのか下から聞こえたのかわからない。

カタツ。

また聞こえた。

明らかに下からだった。

ボクはゆっくりと階段の下を見る。

「……。」

……でも誰もいない。

「……あれ？」

ボクはゆっくりと元の位置に戻るといったその時 -

ドンッ。

「 わっ 」

誰かがボクの背中を押した。

「うわああつ

ゴロッ ゴロッ

ドンッ ドロッ

ドサッ。

ボクは見事に階段を転げ落ち、 踊り場に倒れこんだ。

「……ひ。」

動けない身体を必死に動かし、階段の方を見た。

誰かが立っている。

そして笑っている。

リュウちゃん…？

それとも…さつきの女人…？

ボクの記憶はだんだんと薄れ、
ゆっくりと視界を暗闇が包んで行つた。

「人」

「…ちがん！」

「セイちゃん！」

「...」

ボクがゆっくりと意識を取り戻した時、ママの声が聞こえて来た。

「セイちゃん！ママー。わかる？.

「ん…どうしたの？」

「どうしたの？ じやないわよ！」

セイちゃん階段から落ちて気を失っていたのよ... ハハは病院よ!」

「…落ちた？」

ボクは痛む体を押さえ、さつきの事を思い出した。

「… そうだー、ボク誰かに背中を押されたんだー！」

「え？ 誰に？」

「………… わからない………… でも………… 見覚えあるよ………… 誰だっけ…………？」

「とにかく大きなケガでなくて良かつたわ。

軽い打撲で済んだし帰つてもいいみたいだから帰りましょ。」

「え？ 学校は……？」

「もう夕方でとっくに学校は終わったわよ。」

「え？ もう？」

ママは荷物を持つと先生に挨拶をしていた。
ボクは何気に病室を出でみた。

「…………。」

薄暗い廊下がずっと続いている。

やっぱり病院は嫌いだ。

一時期、毎日の様に通っていた。

あの時も廊下を歩くだけで気分が暗くなつてすぐに家に帰りたくない。

今だつてそうだ。

ふと廊下の奥を見ると髪の長い女人が奥に立つていた。

「…………！」

ボクはすぐにあの女人だつて気付いてずっと見つめていた。

013 オソイキタク

駐車場から家への帰り道、ボクとママは並んで歩いていた。

元気の無いボクを気遣つてかママが話しかけて来た。

「どうしたの？セイセイ。」

「ねえママ。リコウひちゃんはせつまだいこのことなの？」

「ナツかも知れないわね。ママこもよくわからぬけど……」

「どうすればリコウひちゃんは天国に行けるの？」

「リコウひちゃんがこの世にやり残した事が無くなれば天国に行くかもね。」

「やじり残した事？」

「例えばセイセイと遊び足りなことか……」

ママが笑顔でやじりとボクは首を横に振った。

「それはないよ。」

「どうして？」

「だってリュウちゃんは……」

“ボクの事嫌つてること……”

そう言い掛けたがボクはそのまま飲み込んだ。

ママの携帯の着信音が鳴った。

「…はい、もしもし…ええ、はいっえー? 今からですか? …はい。わかりました、すぐに行きます。」

ママは携帯を切るとボクに鍵を渡した。

「セイちゃん! 悪いんだけどママ、今から会社に行かなければなら
ないの。すぐ帰って来るから家で待っててくれない?」

母子家庭のボク達にはそれはよくある事。
ここではボクは我が儘を言つてはいけない。

「うん。わかった」

「家は近くだからわかるでしょう? いい? 寄り道しないでまっすぐ帰
るのよ?」

ボクは鍵を受け取ると、そのまま逃げ出した。

「うさ。だからママも早く帰つて来てね……」

「『めんね……』

ママは車に戻り、すぐに見えなくなつた。

……わかってる。

ママは忙しいんだ。

パパが死んでからいつだってボクの為にがんばつてゐる。

だから……ボクはワガママ言つちやいけない。

『寂しい。』

なんて言つちやいけないんだ。

ボクはじょりく見つめた後、歩き出さうとしたその時

「危ないっ!」

……と声が聞こえたと思いきや、誰かがボクを力いっぱい押し倒した。

「 わつ！」

ガシャアアアアーン

「。」

上から何かが落ちて来たのだ。

「 大丈夫？」

「 …うん」

女の人気が心配そうにボクを見つめる。

「 これは植木鉢だ。危ないわね、もう少しで君に当たるトコだつたわよ？」

「 上から？」

ボクは上を見上げだ。

「…………。」

誰もいない。

隠れたのだろうか……？

それとも最初から見えない相手だらうか……？

「もしかしてリュウちゃん?」

「え?」

ボクの一言にその女の人は反応した。

「……いや、何でもないです。」

「……ねえ君……朝、手帳落とさなかつた?」

「え? 手帳?」

そう言わるとボクはすぐに手帳を探した。入れたはずのポケットにはなかつた。

「……朝、わたしとぶつかって落として行ったのよ。ちゃんとお母さん

んに渡したから安心して……」

「……あ・あいがといひ『れこ』ます。」

ボクはゆづくとお辞儀をした。

「……それより、さつとき向で……『リュウちゃん』って言つたの?..」

「あ・友達の名前です。」

「その子がやつたと思つたの?..」

「ひつん。まさか、だつて死んだもん。そんなワケない……」

「……だから死んだ『リュウちゃん』がやつたの?..って聞いてるの」

「……えー?..」

「お姉さんには正直に言いなさい、笑わないから。」

リュウって子は死んでもあなたの前に現れるのね……?..」

「……ねえ?..」

「…ん？」

「お姉さんの後ろにいる女人の人もリュウちゃんの仲間なの？」

ボクはゆっくりと指を指す。

しばらくの沈黙の後、お姉さんは口を開いた。

「あなたにも見えるのね？彼女が…」

「…………。」

「…それで君はリュウちゃんが殺しにやつて来たと…？」

「…うん…」

ボクは全てをそのお姉さんに話した。

見ず知らずの人に簡単に打ち明けたのはやつぱりお姉さんの後ろにいる人がリュウちゃんと同じ様に天国に行けない人に見えるから。そんな人が傍にいるお姉さんにはボクの気持ちをわかつて貰える。そう確信したから。

「…リュウちゃんか…」

お姉さんは何回もその名前を繰り返す。

「やつぱりボクはリュウちゃんに殺されるのかな？」

「リュウちゃんは本当に君の事を憎んでるの？」

「わかんない。でも今日だつて学校にも現れたんだよ？
色んな人に乗り移つたり、階段から突き落とされたし…。」

「色んな人に乗り移る？」

「それだ……お姉さんの後ろに立つ女の人も見たよ……」

「…………やつ。」

お姉さんはじょりく黙り込んだ。

ボクの言葉に何か引っ掛けつてるようだ。

「暫まほほのマンションの上にすんでるの?..」

「…………の隣となりで住んでるんだー。」

「お父さんかな?」

「…………パパは死んじゃった!..」

「ママと二人暮らしなの?ママの事大好き?」

「うんー…だってボクの為に毎日がんばって仕事してるんだよ。
がんばり過ぎて逆に心配だけどねーお姉ちゃんは…………?」

「…………?」

「パパやママかな?」

「…………お姉さんとお母さん…………?」

「…………?」

「…………。」

しばらぐの沈黙の後、微妙な表情で

「お姉ちゃんが…殺しちゃった…」

「… - え？」

そう言っていた気がしたが、声が小さくてよく聞き取れない。

「ん～ん…何でもない。ほら、上まで送つてあげる。
お姉ちゃんは4階のおばさんのお家に遊びに来てるの……。」

「なんだ？お姉ちゃん…ボクと友達になってくれませんか？」

「え？うん、いいよ。」

「ホント？？」

「うそ。わたっ…！」

「あっがとつー。」

「うしてボクとお姉ちゃんは“友達”になった…。」

フレベーターに乗り、ボクの住んでる階を押す。

「…………。」

「すいませ～ん！待つてください～！」

ドアを閉めようとしたら、買い物袋を持つた女の人が走って来た。

「…はあ…はあ…ありがとう。久しぶりね…セイちゃん！」

「…あ…はい。」

走って来たのはリュウちやんのママだった。

ガタン。

ドアが閉まると笑顔で話し掛けに来た。

「…じゅ～ひやんと学校には行ってるの？」

「…はい」

「良かつた。だつてリュウがいなくなつてから元気なかつたから…」

「おばさんは平氣なの…？」

「…え…？」

「…だつて…」

リュウちやんのママは笑顔を作り、

「元気なフリでもしなきゃやつてられないもの…」

だからセイヒヤンが元気になつて嬉しいわ……

6階に着き、ボクらは部屋へと歩き出す。

「……じゃあまたね！」

「ココから家のママさんが残してボクの隣の部屋へ入つて二つ
た。

「……今のがそのココからの物を取る。」

「……うん。ねえ！ボクの家に来てよーゲームでもやらない？」

ボクはお姉ちゃんを家に誘つた。
だってせつからず良くなつたし、そのまま帰るには物足りない気が
して

「……うん、いこよ」

お姉ちゃんはニコニコ微笑んだ。

ボクはすぐに鍵でドアを開け、お姉さんを中に入れた。

中に入ると、ボクは冷蔵庫からジュースを取り出したグラスに注ぎ、
お姉さんに渡した。

「ありがと。お母さんはあまり家にいないの？」

「うん。でも慣れたよ。ボクもーっだし…」

「わたしも小さい頃はよく一人だつた。
お母さんを恨んだ事もあつたわ。

でも少しずつわかって来るのよね…

お母さんもがんばってるんだつて…ここが君の部屋…？」

「…うん。」

お姉さんはゆっくりと部屋を眺める。
そして、何故か窓から外を眺めていた。

「…もしかして…そこに見えるベランダって…リコちゃんの家？」

「うん…」

「…じゃあ、あれが？」

「…え？」

ボクは窓から隣のベランダを見た。

そこにはリコちゃんがこっちを見て立っていた。
何かを訴えるように…。

リコウちゃんはただ突っ立っていた。
そしてボクを哀しそうな目でみている。

「こつもあーしてボクを見ている。」

「あなたを? セイくん……。」

ボクはゆきへつと首を縦に振った。

「…………。」

「お姉ちゃんこのウシロにいる女の人もそうなんでしょう?
お姉ちゃんが不幸になるのをただ見つめている……そうでしょう?」

「…………そうね。わたしにも分からない。何故、彼女は何もしない
のか……。」

お姉ちゃんは決してウシロにいる女人を見ようとほしない。
いる事に慣れて見ようとしているのか、それとも本当は見えてないの
か……。

「じゃあボクやお姉ちゃんが死んだら喜ぶのかな?」

「それはないわ。自殺でもしようとしたり逆に止められたるわよ。」

そつぱんとお姉ちゃんは歩き出した。

「 もうその話は終わってゲームでもしようか。 」

振り返ったその顔は笑顔だったのでボクも笑顔を作り、

「 ……うん。 」

・と、返事をした。

そして、ボクとお姉ちゃんはゲームに夢中になり、
あつといつ間に夜になつた。

「 もう8時なごママ遅いね。 」

携帯の時計を見たお姉ちゃんはびくつしながら言った。

「 こつもなうだよー仕事忙しいからね… 」

「 ……わかるなあ。 キミの気持ち。 」

でも…やつぱり寂しいモンね。 ちょっと休憩…トイレ借りるわねー

お姉ちゃんはそいつを立ち上がつた。

「 廊下の横にあるよ。 」

「 ……うん。 あれ? あなたのママのパソコンつなげなよ… 」

「 ママそれとかしいからねー…こつものことだよ 」

ボクは苦笑しながらお姉ちゃんを見た。

お姉ちゃんは何故かパソコンの画面を見ながら固まつていた。

「……お姉ちゃん？」

「あ・向ひのにある？わかつた。」

そう言つてトイレに向かつた。ボクは氣になりパソコンを見る。そこには一人の男の人の顔とプロフィールらしきものが書かれている。

「……大友…ナオ…キ？」

ボクはその男の顔をじっくり見る。

「……どこのかで……」

だが、なかなか思い出すことが出来ない。

「……ふう。」

お姉ちゃんがトイレから戻つて來た。
そしてすぐにボクに質問してきた。

「どこのかで見覚えあるでしょ？」

「……え！？」

「君は絶対、この男と会つた事あるさすよ。思へ出して……」

「……わからない。そんな気あるまい……思って任せなこよ。」

「…………やつ。」

お姉ちゃんはいつと腰を下ろした。

「お姉ちゃんは知ってるの？」の人……」

「…………。」

お姉ちゃんはボクの質問に顔を強張らせる。

「ねえ、セイぐる……コウちゃんが死んだのがこの男のせいだって
言つたの？」「…………。」

「……え？ だつてコウちゃんはベランダから落つて……。」

「なんでコウちゃんはベランダから落ちたの？」

「…………え？」

「……やいくとー君は本当は知ってるんでしょ？」

「……え？ なにを？」

「コウくんが死んだのは……事故なんかじゃないって……」

「え？ わからないー！」

「正直に言つてー。」

「知らないー！ 知らないーたらー。」

ボクは立ち上がり部屋へと走り出した。

「……セイくんー。」

そして勢いよくドアを閉めた。

バタン。

「…………。」

「…………。」

「セイくんー！ 開けてー！ 姉ちゃんが悪かった……！」あさり

「…………。」

「セイくんー！ ホントにごめんー。」

「…………。」

「…………。」

「あの田…ボクはシシ『』つたくて夜中に田を覚ましたんだ…。」

「…………。」

「外に人の気配感じたから何處に窓からコウウチヤン家のグランダ
を覗いたんだ…
そしたら…口を塞がれたりコウチヤンが見えて…」

「…え？」

「せしたら…コウチヤンのパパヒマハ…そのままコウチヤン
を…
リコウチヤンを『ポイツ』で…」

「…………。」

「……つまつ、リュウくんは両親に殺されたのね？」

「うん。リュウちゃん…助けを求めてた。ボクが窓から覗いてるの気付いてた…でも…ボクにはどうする事も…」

「……………」

「何度も何度もボクを見つめ、田で訴えていた。」

「だからリュウちゃんはボクの前に現れるんだつー! リュウちゃんを落としたパパやママみつも助けなかつたボクを怨んでるだつー!」

ボクが興奮して言つとお姉ちゃんは首を振り、

「セイべー…それは違つよ…」

「なにが違うのーー…だつてリュウちゃんは表しあつてボクの前に寂しそうにボクを見てるんだよ…」

「ココウくんはさあとにかく伝えよつと想の前に現れたのよ。」

「何かつて？」

「それはわからない」

お姉ちゃんはそう言うと黙つたまま何も言わなかつた。ボクはその沈黙が恐くてドアを開けた。

ガチャツ。

「…………。」

ドアの向ひでお姉ちゃんは壁にもたれ座つていた。そして、ドアを開けたボクを優しく見つめていた。

「わたしにもわからないのよ……彼女はホントに彼女の幽霊なのか……それとも彼の作り出した幻なのか……今でも……」

そつとお姉ちゃんの表情はまじめにコウヤと同じ『寂しい顔』をしていた。

「…お姉ちゃん…」

ボクはゆっくりと歩き、そしてお姉ちゃんの傍に座った。ボクとお姉ちゃんはしばらく何も話さなかつた。沈黙が恐かったけど、お互に心が通じ合えた気がした。

「でも少しでも彼に近づけた。」

「え？」

ボクがやつてお姉ちゃんの傍に座つた時、ママが帰つて來た。

「ただいまー!遅くなつてごめんねー」

買い物袋をたくさん手に、ママはドタドタと歩いて来た。ふと、ボク以外の人間がいる事に気が付く。

「……あら、あなたは確か……」

「……どうもすこません。勝手にお邪魔して……」

ママはびっくりしたかと思えばすぐに笑顔になり、

「いえいえ。ちゅうど良かつた！たくさん買い物して来たんで一緒に食べません？落とし物拾つた御礼もまだですし……」

「……あ……でも……」

「やつしなよー。ママの料理つまごんだ！」

ボクは皿邊でお姉ちゃんに言った。お姉ちゃんは少し考え、

「そうね。」

と、やつしきまでの『寂しい』表情は跡形もなく笑顔で返事をした。そしてボク達は楽しい夜を過ごした。

「行つてもーす！」

ボクはこつもの様に学校へ行こうとドアを開ける。

「氣をつかへねーちやんと手帳は持つてるね?」

「うふー! 行つてへるー」

ボクは急いでエレベーターに向かい、ボタンを押す。

ガアアアアーッ

ドアが開き、一階のボタンを押すとドアは自然に閉まつとした。

その時

「待つてー！」

ガダン。

外から誰かが閉まつとしていたドアをじじ開けた。

「間に合ひたあ

やつ言ひたのはつコウちやんのパパだった。ボクは少しひくりした。

「脅かしてすまないね。おじさんも急いでいるからね。」

リュウちゃんのパパは笑顔で照れていたが、目は笑っていなかつた。ただ……あの時と『同じ田』をしていた。

「…………。」

……ボクが部屋にいた時……

つコウちやんを落とした後……ボクに気が付いた時の……

……あの田に……

017 リュウチャンノパパ

Hレベーターはゆっくりと下りている。
ボクはあまりの恐さにじつと点滅している数字をみていた。

「オオオ…」

「……。」

「……セイくん……」

突然、ボクを呼ぶのでボクは声が裏返る。

「は・はい?」

「オオオ…」

「見たんだろ?」

「…………」

「オオオ……」

「何を……？」

ボクはワザと知らないフリをした。

「誰にも言つてないだろ……？」

「オオ……」

「何言つてるの？おじさん……」

リュウちゃんのパパはボクが知らないフリしたのが~~気に~~いらないのか、急に顔を耳元に近づけて言つた。

「君もリュウのようにポイ捨てされたいのか？」

「……………？」

ボクはあまりの恐怖にただ唾を飲むしかなかった。

ゴオオオオオーッ

ガタン。

一階に着くとドアが開いた。

ボクはリュウちゃんのパパと田を合わす事なく、エレベーターから降り、逃げる様に走った。

ダツダツ。

「はあ…はあ…」

タツタツタツタツタツ

後ろを見たが追つてくる気配はない。だけど、止まる事は出来ずそ

のままバス停まで走った。

「はあ…はあ…はあ…」

タツタツタツタツタツ

バス停に着いた。

到着予定時間でないせいかまだバスは到着していない。

「…はあ…はあ…」

ボクは必死に呼吸を整えようと、深呼吸をする。

「…すう…はあ…すう…はあ…」

バスが見えないか奥に目をやる。

すると、見えたのはバスではなくリュウちゃんのパパだった。

「…え?」

普段ならリュウちゃんのパパは反対方向でこっち側を歩くなんて有り得ない。そして何故かまっすぐにボクを見つめていた。

ザツ。ザツ。ザツ。

やつへつとボクに近づいて来る。

「…………なんぞ?」

ザツ。ザツ。ザツ。

「…………う……ああ……」

やつへんぐくなつたボクは恐怖で動けない。

「…………ああ……あ。」

ザツ。ザツ。ザツ。ザツ。

リュウちゃんのパパは無表情でどんどん近づいて来て、その顔が無

表情だつて事もわかつて來た。

ちょうどその時、バスの姿が見えた。

「…はつ！來たつ

バスはリュウちゃんのパパを通り越し、ボクの前に停車する。

ガチャツ。

そして扉が開いた。

ダダダダダ…。

ボクは階段を駆け登り、バスに勢いよく乗る。

「もつと落ち着いて乗りなさいっ！」

先生の注意を無視してボクはいつもの席に座ると、窓から外の様子を見た。

「…………あれ？」

リュウちゃんのパパの姿はどこにも見えない。そのまま会社に行つたのか、ボクの見間違いなのか…。

「ワザとじりじり…みんなに目立ちたいの？」

「…………え？」

萌ちゃんがボクに向かって言った。

「ちう…ちう…違つよ…目立つつもりでしたんじやない！」

「嘘よー見え見えなのよー年上のクセにガキねー！」

「…………っー」

ボクはムカついたが、何も言い返せなかつた。しかし何で萌ちゃんはボクにいちいち突つ掛かるのだ？！…

そつ思つてゐるうちにバスは学校へと到着した。

ボクはゆっくりと立ち上がり、いつもの様に最後に下つりとした
ら運転手さんがボクに話し掛けた。

「… ょお、ボク。人生楽しんでるかい?」

「…………？」

ボクは運転手を見つめた。

「…………あ。」

「お兄ちゃんとゲームしようか?」

「…………！」

「うか…！」

「びつで見覚えあるはずだつ…！」

昨日、ママのパソコンに出てた男、…

ナツキお姉ちゃんが言つてた…

この運転手こそが

オオトモ ナオキ

018 イイカケ

ボクはジッと運転手さんの顔を見つめた。

「…………。」

「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

「ひひひひ」

ボクは返事をするとバスから降りた。

「リュウが淋しがってるぜ。お前がいないからな……」

「え！？」

振り返ると運転手さんは笑っていた。

「お前がリュウを殺した。」

「……ひつ、違う。殺したのはリュウちゃんのパパとママだっ……。」

「でもお前は見ただらう。リュウの助けを求める用を……」

「……でもつーボクにはどうする事もつ……」

「そりかな？窓を開けて叫ぶ事が出来たはずだ。ママに助けを呼ぶ事だつて……」

「間に合わなかつたんだつ」

「ホントは違うだろ？」

「えー？」

「死んで欲しかつたんだろ……？」
「…………つー？」

「お前にとつてつコウは邪魔だった。つひとおしかつた。」

「…………つ」

「セイくんー何してんのー早く教室に行きなさいー！」

奥から先生の怒鳴り声が聞こえる。

それでも構わずにボクは運転手さんを見つめていた。

「だから君を選んだ。」

「…………え？」

ガダン。

バスのドアは閉まり、そのまま発車して見えなくなつた。

「…………。」

「セイちゃん！何ボッとしてるのー早く教室へー！」

先生はズカズカと歩いて来てボクの手を引っ張つた。

「全く！あなたはいつから問題児になつたのー？まるでリコウウチや
んみたい！」

「…………え？」

「いつもそういうやつて周りの人を困らせてばかりで！
あなたもそんな風になつて欲しくないわ！」

先生はすぐ怒っていた。

それよりもボクは今、初めてここでリコウウチやんが問題児だと気付
いた。

「え？ こひどいでリコウウチやんが問題を起したの？」

そつ言いかけたが、あえて聞かなかつた。

教室に入るとみんながボクを見ていた。
相変わらずみんなのボクに対する視線はすぐ冷たく恐かつた。

「…………。」

ガララッ。

ボクは静かに席につく。

「何ダラダラしてんのよー一年上のクセにトロいわねー！」

萌ちゃんがボクを見るなり怒鳴る。
ボクは萌ちゃんをジッと見つめた。

「な・何よー睨んだつて恐くないわよーアンタなんか…」

「…ねえ…リュウちゃんの事なんだけど。」

「は? リュウがどうかした?」

「…問題児つて本當?」

その質問に萌ちゃんは反応する。

「……誰が言つたの?」

「……。」

「あ・先生しかいないか…そんな事無いの。」

「ホントなの?」

「そうかもね。」

「え? なんで? だつて別に学校では普通だつたじゃない?
いつも一緒だつたからわかるモノ。」
リュウちゃんはボクがいないと何こも出来ないし…」

「クスッ。ホント何もわかつてないね。
セイちゃんは…。あのねー、
リュウくんはね…」

「パララシ…今は授業中よー静かにしてっ!」

萌ちゃんが何かを言いかけたが、
先生が注意してきたので話しあげで終わってしまった。

「……。」

ボクは萌ちゃんの言いかけた言葉が気になり苛立ちを隠せなかつた。

019 イキテイル？

休憩時間、ボクは萌ちやんに色々聞いたしだが、萌ちやんの姿はなかつた。

「…あれ？ セイセイもでいたの？ …」

ボクは廊下に出たが、萌ちやんらしき姿はない。

「セイセイ？」

唯一、このクラスでそれなりに仲の良い友達がいた事を思い出した。

彼の名前は『アコム』くん。こんなボクにも普通に接してくれる男の子だ。

「アコムくんっ！ 教えて欲しい事があるんだ！」

休み時間にも関わらず机で勉強をしていたアコムくんがボクに気付いて返事をした。

「どうしたの？ セイセイ？」

「ココウチやんの事だけ？ …」

「うそ、なに？」

「問題児だったってホント?」

「……りん……セイくん本当に何も知らないの?」

「知らないよつーだつてあんまりしゃべらないし……ずっとボクの後を付いて来てただけじゃない!」

「うふ、最初は。だけ最近になつてから急に喋り出す様になつたんだ。」

「え? ホントに?」

「突然だつたよ……びりじてだらり。」

「…………。」

タツタツタツ…

「……ん?」

恋の向こうにココウのかやんの後ろ姿が見えた。

「……ココウのかやん?」

ボクは急いで後を追つた。

「待つてー！リュウちゃんー！」

走り去るボクを不思議そうに眺めるアコムくん。

タツタツタツ。

リュウちゃんは角を曲がる。

「待つてー！」

ボクも急いで角を曲がる。

「あつー！」

曲がると田の前にリュウちゃんのママが立っていた。

「あー、セイちゃん…どうしたの？」

「…まあ…まあ…ねえ…今…リュウちゃんがいたよね？走つて來た
でしょ？」

「…………ココウが？」

「うふーあれは絶対そつだー。おまんも見たでしょ。」

「セイセイ……ココウもせつこなへなへなったの。その意味わかるでし

「あ

「わかるナビ」

「だか、ひびき着いて……」

ココウがこのマスクをかぶつて優しくボクの頭を撫でた。

「…………。

ボクはココウとのマスクの手を見た。そして、見覚えがある事に気がついた。

「…………。」

「…………あひあへたのっただじひべ」

「…………。」

「……やべりあん……？」

「……！」の手だだ……」

「……えー……？」

リュウちゃんのママは不思議そつな顔をする。

「……やうだよー・まちがいなーつー」

「何がまちがいないの？・ケわからぬい事言わぬいのー」

「！」の前…ボクを突き落とした手だだ…

「…何を言つてゐの？」

「だつて親指の付けねにホクロがあつたんだモソー…あれはおぼさんだつたんだね！？」

「……。」

ボクはリュウちゃんのママの顔をジッと見つめていた。リュウちゃん

このママがいるのを見てる。

「……知らなこつこしてればここのは……」

リコウちゃんのママはボソリとハッキリとロボットの様にジリジリと歩み寄る。

「……なに?」

ボクが聞くとリコウちゃんのママは一タこと笑う。ボクは恐くなつて後退りする。

「……あの時、死んでは良かつたのこ……」

ボクは怖くなりながらも口を開いた。

「リコウちゃんみたいにボクを殺すの?」

「リコウは事故で死んだのよ。」

「じやあ何でボクを殺すの?ボクがあの晩見たから殺すんでしょう?」

「……違うわ。リコウが寂しがつてると困つて……ねえ、セイちゃんも寂しいでしょ?」

「…………。」

「…だからリュウのせばこ…」

「勝手なこと言つなつ！殺したのはそいつじゃないかっ！なのに…
なんでボクがつ…」

ボクはかなり頭に来た。大人の勝手な都合で子供を殺したクセに、
その次はボクを殺す？
…なんて馬鹿らじい話なんだ！

ボクは力いっぱいリュウちゃんのママを殴りつけた。

「…………あつーーーーー！」

こう見えてボクは17歳。
体だつてもう大人に近い。
力だつてある。

だから、どつかれたリュウちゃんのママは「おみよ」と、みんな
ながら姿が見えなくなつた。

「ロロッ ロロッ ロロッ
ロロッ ロロッ ロロッ

リュウちゃんのママはそのまま後の階段を転げ落ちたのだ。

「ああああつ！」

「……。」

「生きてるの。」

「え？」

ボクは突然の声に後ろに振り返る。萌ちゃんが背後に立っていた。

「ココウは生きてるの。」

「生きてるっ。」

萌ちゃんが無表情でボクを見ていた。

「生きてるへ、死んでる事へ。」

ボクはもう一度萌ちゃんに問い合わせた。だつてリコウちゃんは死んだもん。ちやんとの田で…

「生きてるのー。」

「じゃあ… 田にも見えるの？ リコウちゃんの幽霊が…」

ボクは恐る恐る聞く。

「幽靈？ 幽靈って死んだ人がなるんでしょう？ リコウは死んでないってばー。わざわざから言ってるじゃない！ 頭悪いね！ 年上のクセに…」

何故かキレる萌ちゃん。ますますボクは意味がわからず、言ひてはいけない事を口走る。

「嘘だよー。だつて見たんだモンー。隣のブランダから落ちたのー。」

萌ちゃんはしばらく黙つてたが、また口を開いた。

「セイちゃん…。気付いてた？ クラスのみんなからこじめられてたの…。あんたいじめられてのよ…？」

「え？」

「黒板消しが落ちてきたり、モノが失くなったりしてたでしょ？クラスのみんなからシカトされたり…自分で気付いてたでしょ？」

「え？ そうなの？」

ボクは驚いた。みんなからいじめられてたなんて。初耳だ。… そろか、だから視線が冷たく感じたんだ。黒板消しもたまたま落ちて来たワケじゃなく… 全部意図的なんだ？

「全部ね… リュウの命令なの。」

「えー… リュウちやんの？」

ボクは更におどろく。

「そう。リュウは自分の手を汚さず、アンタをいじめてたの。その『イメージ』はまだ続いてる…。だからリュウは生きてるの。」

「じゃっ… じゃあ… やめたらいじやないか… リュウちゃんはもういないんだから…。」

「アンタが悪いのよ！ クラスで年上のクセに知能レベルが低いアンタがつ！ 見ててイライラするものつ！ みんなそう思ってる…だから

なくなるないの？ー全部アンタが悪いーアンタの存在が『イジメ』を作ってるの！

萌ちゃんは叫んでいた。口からはよだれが垂れ、瞬きすたらまともにできない。筋肉をうまくコントロールできない。
そうだよ。ボクらは障害者。ここにいる人間、まともじゃない。萌ちゃんだつてりっぱな障害者。

でも、ボクは我慢出来ず、言つてやつた。

「 クズ！」

それがせいいっぱいだった。だけど、萌ちゃんには効いた。

「 …ううう～」

突然、涙を流してはボクに向かつて走つて來た。

「うああああああつ！」

萌ちゃんはスムーズに動かす事の出来ない身体を走らせ、ボクを叩こうとした。

だが、ボクは『ひょい』と萌ちゃんの攻撃をよけた。

「あーーー！」

そう思つた時には遅かった。リュウちゃんのママ同様、萌ちゃんも落ちたのだ。

「うああああーーー！」

『プロラ プロラ プロラ プロラ プロラ プロラ』

「…………あ。」

『ナシ。ナシ。ナシ。』

「…………。」

「…………。」

じぱりべの沈黙。

ボクはゆづくと睡を飲み込む。

萌ちゃんは動かなかつたが、意識はあるひへじ声を出す。

「……うううう。」

「萌ちゃん。」

萌ちゃんはゆづくと身体を起した。だが、落ちたショックのせいからまく起き上がりがない。

「うあああああああ……」

身体をバタバタさせつめき声をあげる。

「うあアあわあわ」

「…………。」

ボクはゆっくりと後退つをかる。そして走り出した。

タツタツタツ…

「……まあ……まあ……」

ボクのせいじゃない。

あれはみんなリュウちりんのせいだつ！

ボクは悪くなつーー！

リュウちりんのせいー！

「まあ…まあ…」

だが、ボクの走りはいつしかスキップに変わつて行つた。

ボクは家に帰つてくるなり、ナツキお姉ちゃんにバスの運転手さんがパソコンで見た、『オオトモナオキ』だったことを伝えた。

「そつか。そんな目の前にいたのね…」

「うん…まちがいないよ…あいつ…毎朝、ボクを見てたんだつ…」

ボクはそつきの萌ちゃんの件があつたせいか、妙に興奮していた。

「ねえ明日の朝…わたしもバス停に行くわ。この目で確かめたいし…いや、学校がいいかな？みんな降りた後に声を掛けてみるわ。」

「駄目だよ…危ないよ…あいつ…なんか恐い…！」

ボクがそつきとナツキお姉ちゃんは微笑み、

「大丈夫よ。わたしなら。彼は問題じゃない…」

「…え？」

「それにわたしには時間がないかもしれない。」

ナツキお姉ちゃんはポツリと呟いた。

それってどういう事？って聞きたかったけど、何故か聞けなかつた。

ボクは家に帰った。夜9時過ぎだといつもママはまだ帰ってきてない。家の静けさがボクには恐かつた。孤独だつた。

「ボクは17歳だ。もう半分は大人なんだ。こんなコトで怖がつちやいけないんだ…淋しがつては…」

ボクは独り言を言つては自分の部屋に入った。相変わらず部屋は不気味さを増してた。リュウちゃんが死んで以来、ボクは自分の部屋が嫌いになつた。そして、隣が見えるその窓も嫌になつた。

「…………。」

恐る恐る窓を見る。隣のベランダが見え、どうやら、中には人はいないようだ。

「…………。」

ボクはベッドに横になり、目を閉じる。そしてあの時の事を思い出す。

リュウちゃんが『ポイ捨て』された時の事。

リュウちゃんは小さくなつて行つた。雨と一緒に見えなくなる。まるで闇に吸い込まれていく様に。

ザアアアアアアアアアーツ

消えていくリュウちゃんを見届けた後、2人は何かを話していた。リュウちゃんのママは泣いていた。なんで泣くんだ…?自分でやつといて…。リュウちゃんのパパは泣いてるリュウちゃんのママを抱きしめながら、ボクを見る。ボクはびっくりしてそのままベッドに戻った…。

でも、なんでだろ…。

なんで2人はリュウちゃんを『ポイ捨て』したんだろう…。

なんで…そんな事する必要があつたんだろう。

ボクにはどう考えてもわからなかつた。わかるはずもない。そしてボクはいつしか眠りについた。

気付いた時には朝だつた。

「おはよう。

ママがいつもの様に朝食を作つていた。

「おまかせ、アリ...」

眠い目をこすつてボクは顔を洗つた。歯を磨いた。服を着替え、朝食を食べた。

「行つてきまあ～す！」

ボクはエレベーターへ向かう。

ピンポン。

機械音と同時にエレベーターの扉が開く。

「」

そりだまじかわがさんのパパとママがいた。

しかも、リコウちゃんのママは車椅子に座つていて頭に包帯を巻いていた。そりだー！ 昨日学校に来て階段から落ちたんだ。

「...」

ボクは一瞬にして怖くなつた。昨日の出来事を責め、怒るんじやないかと。リコウちゃんのママだけでなくリコウちゃんのパパもボクを怒るんでは?..と。

「おはよう。今日もいい天気ね。」

卷之三

ボクは黙つたまま後退りをする。

リュウちゃんのパパは黙つたままボクを見ていた。顔付きが怖い。

「今から学校？リュウ

「え？」

「嘘つー。ここにつけど、ウジやない。」

リュウちゃんのパパが叫ぶ。

「何を言つてるの？あなた自分の子供を忘れたの？」

「ここにはリュウじゃない！リュウは死んだんだつ！」

「じゃあ…田の前にいるこの子は誰だつて言つの？おかしい事言つわね？リュウ…今日のパパ面白いわね。ふふ」

そう言って肩を揺りしながら笑うリュウちゃんのママ。

「……っ！」

ボクがリュウだつて？

リュウちゃんのママがボクのママだつて？

リュウちゃんのパパがボクのパパだつて？

ボクにはパパなんていないつ！いないんだつ！

ボクはただ怒つていた。

022 ナツキオネエチャントナオキ

ボクは階段から下に降り、バス停へ向かつた。

なんて意味わからない話なんだろう！

リュウちゃんのママがボクの事を『リュウ』と呼んだ。あんなのと一緒にしないでくれ！

ボクはそう叫びたかつた！

でも言えるワケがない。だつてボク、そんな『キャラ』じゃないモノ。バス停が見えた、既にバスの姿があつたのでボクは急ぎ足でバスに向かう。

「遅れてごめんなさい！」

「…………。」

運転席には『オオトモナオキ』が居た。

ボクは目を合わさない様に中に入る。

そういうえばナツキお姉ちゃんがあいつの顔見る為に学校へ行くつて
言つてたな……。
学校にいるんだろうか？

ブウウウーン。

バスは動きだし、学校へ向かつた。

「セイくん！あなたに後で話あるから学校着いたら先生について来なさい。」

「…はい…」

ボクはバスの中を見渡す。萌ちゃんの姿は見えない。先生が何を言いたいのかわかった。きっと昨日の事だらう。

ブウウ…

バスはゆっくりと学校へ向かつている。

ホントにナツキお姉ちゃんはいるのだろうか…？

ボクは少し気になっていた。そしてバスは学校の門に入った。

「……。」

だが、ナツキお姉ちゃんの姿はない。

ボクは立ち上がり視界をグルグルしたが、やはり見えない。

「セイちゃん！まだバスは停まってません！立ち上がつたらダメで
しそう！？」

先生はすぐに注意をしたが、ボクの頭には入らなかつた。
そしてバスは停まる。

ガタン。

ドアが開き、前の人から順番よく降りていぐ。

「……。」

ボクはじつとしたまま動かなかつた。

「あれ？さつき立ち上がつてたかと思えば今度は座つて動かない気
？」

先生がボクに向かつて言つ。

「違うモン！ちゃんと降りるモン！」

ムキになつたボクは立ち上がりバスから降りようとしたら、

「ふふつ」

運転席にいた『オオトモナオキ』がボクを見て笑つた。ボクは人に笑われるのが嫌いだ。特に今みたいに鼻で笑われるのが。ボクは『ナオキ』を睨みながらバスを降りると人どぶつかつた。

「…すいませ…あ！」

ナツキお姉ちゃんが立っていた。

ナツキお姉ちゃんはじつと運転席を見ていた。そして口を開く。

「ひさしひりね。ナオくん…」

「……。」

だが『ナオキ』は反応しない。

「セイちゃん！早くこっちに来なさいーお話がありますー！」

先生が奥から呼んでいた。

「あなた…一体なにがしたいの？」

ナツキお姉ちゃんは続けて聞く。

「セイちゃんこっちに来なさいって言つてるでしょー！」

先生がまたボクを呼ぶ。ボクは仕方なく先生の方へ歩いて行つた。バスからゆつくりと遠ざかる。

「何故… じいが？」

最後に聞こえた『ナオキ』の言葉。その瞬間、バスの扉は閉まり、バスはナツキお姉ちゃんを乗せてどこかへ消えて行つた。

ボクはバスをじっと見つめていた。先生がボクの手を引っ張る。

「…あ。」

どこに行つたんだろう…？

ボクは消えていくバスをただ見つめていた。

そして指導室みたいな所に連れて行かれた。

そこには萌ちゃんと母親がいた。一人はボクをすごい目で睨んでいた。

023 ボクノハツゲン

「セイくん……あなた萌ちゃんを階段から突き落としたそうね？」

先生の最初の一言だった。
ボクはきつぱりと言った。

「違います！ 萌ちゃんは自分から落ちたんですよ！ ボクは萌ちゃんに
触れません！」

「嘘よ…じゃなきゃ何であたしか落ちたワケー？」

萌ちゃんはよだれを垂らしながら反論して来た。

「やつです！ 萌は自分から階段を転げ落ちる子じやあいません！ 絶
対誰かが突き落としたんです！」

萌ちゃんのママはボクを睨みながら言った。

「…………」

ボクは返事に困った。だってボクは何もしないのに……それ以上何
を説明すればいいのだろうか……と。

「せりー何も言えなくなってるーだってホントの事だもんね？」

萌ちゃんは一タつきながらボクに言った。

「違うモンー。ボクは何もしていない……。」

ボクが否定をした瞬間、ドアが開き、ママが入って来た。

「すいませんー。遅れちゃって……。」

「……ママ？」

「私が呼んだのよ。」の事はちやんとお母さんも言わなことね。

先生がボクを見つめながら囁く。

「でもボクは何もしていないー。」

ボクは大声で怒鳴った。

「セイちゃん！ 静かにして……。」

ママがボクを止める。

「まあ、萌も軽いケガで済んだからいいんですけどナビ一度といつこう事が無いようにお母さんからもちやんと言つて下さるー。あと先生方もぐれぐれも気をつけくださいー。」

萌ちやんのママは怒りを抑えながら囁つた。

「ほー。#1Jと#2Hに號（ハガキ）せました。」

ママと先生は頭をトバる。

「なんでも…なんでもママが謝るの！？ボクは何も悪いことはしてないのに…悪いのは…ココウチヤンだよー。…」

ボクは少し間を置いて続ける。

「…そうダメ…ココウチヤンだよー。これは全部ココウチヤンがやつたんだー。」

「セイバーカゼめなセーー。」

ママが怒鳴る。

「なんで？だつて本物の事だよー。」

「いいから静かになれー。」

「でもう…ー。」

ボクの発言に萌ちやんのママが質問した。

「ココウチ…あの子は確か…事故でお亡くなってしまった子でしょ？何

である子が？」

「…………。」

「リコウは死んだのよ？死んだ人間があたしを突き落とす…？ありえないね！ホラ！ママ！セイちゃんつてこうやつてこつもあたしをいじめるんだよ…？ひどこと思わない…？セントザマヨー。」

萌ちゃんの意味不明な言葉にボクは我慢出来ず、

「……なに言つてんだよ…キニガ生きていなかつたんぢゃないか…！萌ちゃんがリコウちゃんの命令でボクをいじめてるつて…ねえ、先生…ボクつて教室でいじめられてたんですか？」

「何言ひしの？そんなワケないでしょ！？…こじめなんて…そんな

…」

「だつて萌ちゃんが言つたんだモン。」

「セイーもうやめなセイー。」

「だつて…」

「お母さんこいつたこびりこり教育をなれてるんですか？死んだ子に

責任をかぶせるなん……

「すこまかこと。」
「……」

マイマイ頭をあげた。

「だからボクは向もひまなかつて……おの罪だつて……えりにがめ、
ココロのマタニヒ。」

「ココロがママがいたた。」

「……萌めが階段落ひる前にココロウタのママがいたた。だ
けちんも見たよな？」

「なに言つてんの？ 誰もこないわよ。ママもここ。頭痛くな
つて来た……」

「……もう、萌めとは優しくから……わかった。今日の所は帰つま
じよ。失礼します。」

アリスへ家へやのママが帰つた。

ボクは訳がわからずただ黙つていた。

「…ママ」めんなさい。でもボク何もしてないよ！信じてー。」「

ボクは今日一日だけ謹慎処分を受けた。ボクの発言があまりにも現実離れしていく信じて貰えなかつた結果。

学校から出たママはあまりしゃべるうとしないのでボクから出た。した。

「わかつて。でもリュウちゃんの名前を出したのはマズかったんじゃない？死んだ人間が何かをやつたとしてもそれは見た人しか信じられない話よ？」

「…うん。」

ボクはつづむこたまま歩いた。ママは一つ溜息を漏らすと笑顔になり
「もうやめよ？リュウちゃんの話は…だ…ママ今日もつ仕事
ないから今から映画でも観に行へ？」「

「ホント…行く！行く！」

ボクは体全部を使って嬉しさを表現した。それはそれはまるで「コージカルのよこ」。だってママと出掛けなんて久しぶりだもん。ママも嬉しそうなボクを見て微笑む。

そして、その夜。

映画を観たあと、ボクとママは買物や食事をした。

「ママ楽しかったねー！」

「そうね……最近、セイちゃんの相手してあづられなかつたからママも満足ー。」

ママが一匹ひと笑うのでボクもつられて笑う。

「…………あれー？」

奥の方にナツキお姉ちゃんの後ろ姿が見えた。

「ナツキお姉ちゃんー！」

ボクは大声で名前を呼んだ。

「…………。」

だが、その後ろ姿はこっちを振り向く事なくそのまま消えて行った。

「え？ 今のはナツキちゃんなのー？」

ママが呟つ。

「だと思つたんだけど、違うかな？」

「振り向かなかつたって事は違つんじやない？」

「… そうだね。」

「うじてボクとママは家に帰つた。

翌日。

「行つてきまあ～す。」

「ちよつ…！ セイぢちゃんいつもよつよつ30分早いわよ。今、バス停に行つてもまだバスは…」

ママが慌てて歩いて来た。

「うそ、ちゅうどくのナツキお姉ちゃんと話したくて……」

「ほん朝から迷惑よー。だいたいまだ寝てるかもしれないの」「……」

「起きてるよー。毎日6時には起きてるみたいな事言つてたから。そのために早く起きて御飯も食べたんじゃないかな？」

「ママはたまたま早く起きたと思ったのよ。あつから迷惑じやなければいいけどね……」

「大丈夫だよー。じゃあ、行つてへる。」

「いなかつたらすぐに戻るのよ~。」

「うんー。」

ガチャツ。

バタン。

ボクはママがまだ何か言いた氣なんで逃げるよードアを開け、閉めた。

「……ふう。」

ボクは早速エレベーターに向かおつと歩きだしたら、背後から音が聞こえた。

ガチャツ。

「……ん？」

振り向くと、リコウちゃんの家のドアが少しだけ開いていた。

「……………」

そして、隙間から、リコウちゃんのママの顔が見えた。

「……………？」

ドアは更に開き、リコウちゃんのママが車椅子で、圧迫して、ボクに向かって広げた。

「わたくしは、リコウ。まあこれで……」

「え？」

ボクがあっけに取られていたらしく、中から、リコウちゃんのパパが出て来た。

「うひー……知らないか……」

リュウちゃんのパパは車椅子を家に引っ込めようとする。

「あなた何するのー? わたしはただリュウに…」

「リュウは死んだんだ! まだわからないのかつー! ?」

「何言つてるの? だつて目の前に…あー待つて! 行かないで! ー!」

ボクは気持ち悪くなつたので走り出した。階段から下のナツキお姉ちゃんのいる家へ向かつた。

なんか…気持ちわるい。

ピンポン

ガチャツ。

ドアの向こうからナツキお姉ちゃんが出て來た。

「朝からじめんなさい。昨日の事が気になつて…」

「……。」

ナツキお姉ちゃんは黙つたままボクを見つめていた。

「ナツキお姉ちゃん?」

「まだ時間あるよね? 中に入つて...」

そういふとナツキお姉ちゃんは奥へと歩きだした。ボクは中に入るヒドアを閉めた。

バタン。

「...あの...叔母さんは?」

「昨日から泊まり込みで仕事に行つてゐる。ジュース飲む? そこに座つて...」

「...うん...」

ボクは田の前にあつたソファに座つた。

「昨日の運転手、たしかにナオキだつた!」

「.....。」

「えー?」

お姉ちゃんはボクにジュースを差し出す。

「ありがとう。」

「……あの後バスはそのまま動き出した」

「……うん。」

ボクは一口ジュースを飲む。

「どれくらい走ったかな？気付けば林の中だった。そこでバスは停まったの。」

「……。」

「すると突然、ナオキが笑い出したの。わたしは普通に「何がおかしいの？」って聞いたら「全部さ……」って。わたしは言ったわ「まだ馬鹿な事続ける気？」って。「馬鹿な事？何が？人を支配する事が？くははははは」…彼はずつと笑つてた。」

「……。」

「あ～あ、わかつてたのにね。」

「え？ わかつてたつて？ 何が？」

「彼はね、ナオキじゃないわ。」

「え？ でもパソコンに出てた顔だつたよ！」

「うん、そう。パソコンそのモノが違う顔なの……」

「じゃあ名前が一緒に別人だつたつて事？」

「まあ……カモフラージュつて事かな？」

「ええええ！」

ボクは本物だと思ってたので白けてしまった。

「そろそろ時間じゃない？」

そう言われたボクは時計を見た。

「わっ！ ホントだ！ 早いなあ！」

ボクは一気にジュースを飲んで立ち上がる。

「『』みんなさいー帰つて来てからまたお話をしよーねー。」

ボクは急いで玄関に向かった。

「セイちゃんー。」

お姉ちゃんがボクを呼び止める。

「んー？」

「…何でもない…行つてらっしゃい…」

お姉ちゃんは笑顔でそう言った。

「うんー行つてきまーす」

ボクは家を出た。バス停には既にバスが停まっていたので急いで乗る。

そして、運転席にはナオキがいた。

「セイくん…おはよー…おはよー…」

一やけながらナオキは笑った。そして小声で

「お前の大好きなねーちゃんを犯してやつたぜ。くははは…」

「……え？」

「セイちゃんー早く席に着きなさいー。」

先生が怒鳴るのでボクは急いで座る。と同時にバスは動き出した。

ブウウウウ~

「…………。」

どいつも事?『犯してやつた』っていつ意味がよくわからない。

「…………？」

「…ヒツチな事を無理矢理やられたって事だよ…」

背後から声が聞こえて来た。

「…リコウちゃん?」

「しつ！あまり声を出すな。後ろも振り向くな。」

「……ええ……もうやめようか?」こんな事して何になるの?」

「セイちゃんが苦しみばそれだけでいい。」

「どうして？意味がわらないよ。」

「僕にはヤマハさんしかアーティストはいらない。」

「トモダチ？ それがトモダチにする事か？」

……トモタチだからこそ意味がある。イジメかいがね……クヒヒヒ。

L

卷之三

ボクは耐え切れず耳を塞いだ。

学校に着くまでその笑い声は止まなかつた。
そしてボクも後ろを振り向く事はなかつた。
その笑い声はボク以外に聞こえていないみたいだつた。

026 ハイセツブツ

バスは無事に学校に到着し、ボクは教室に入ろうとドアを開けた。

ガララ…。

パフッ。

頭に何かが当たった。

「…………。」

いつもの黒板消しだった。

「アハハハハハハハ…」

クラスのみんなが笑う。

そしてボクはむせる。

「ゴホッ ウオッホッ」

「あはは…ばあ～か！ばあ～か！あひやひやひや」

萌ちゃんがボクを指差して笑う。

「……ケホツ」

ボクはチョークの粉が田に入つたので見えない視界で、何とか席に着いた。

「…ん？」

お尻に何かが当たつたので思わず立ち上がる。

ガタタツ

お尻を触ると茶色い物体が手に付いた。

「あああああー！セイちゃんがウンコ漏らしてる」

誰かが大声で言った。

「え？」

ボクは手に付着している物体の匂いを嗅いでみた。

確かにそれはウソ「だった。

「ええ。」

このカンパはどちらんボクの物であるはずがない。

ボクはどうしていいのかわからずボッ～としていると、教室に先生が入つて來た。

「おせよーーーベリしたの？ 驚がしいわね？」

「…先生…セイちゃんがウソ「もらしたんです。」

「ええ…？ ホントなの？」

先生はそう言いながらズカズカとボクの前までやって来てはお尻の方を見た。

「臭いわねえ。」

「…先生…ボクがやつたんじゃありません！ 最初から椅子に乗つて

あつたのをボクがその上から座ったんです!」

ボクは半分泣きかけて訴えた。

「じゃあ…これは誰のウソだつて言つの? あなた以外の誰かのモノ?」

「わかりません」

「…それとも…これもリュウちゃんの仕業だとでも言つむつ…?」

「…え?」

「セイちゃん…あなたの悪いクセがまた出たわね? いくらリュウちゃんがいないからって死んだ人間のせいにするのは良くないわ」

「…………」

ボクはショックを受けた。

先生の口からそんな言葉を聞くなんて…

目からは大粒の涙が溢れ、下をじっと見つめていた。

「…泣くヒマあつたら手を洗うなり、ティッシュで拭くなりしたら? セイちゃんのせいで授業も遅れるのよ?」

「…ひどいよ! 先生…どうしてボクの言つ事信じてくれな…ヒック…いの?」

ボクは上ずる声を必死に抑えながら言った。

「……つたくしようがないわねえ……ホラ、トイレに行って洗ってきて
しょ。先生も一緒に行つてあげるから……」

先生はボクの手を引つ張つて歩きだした。
ボクはトイレに着くまでの間、涙が止まらなかつた。

「…………。」

ガラガラ。

ピシャッ。

トイレに入るなり先生が言つ。

「セイちゃん、よく聞きなさい。先生はね……あなたの言つことなん
てこれつぱちも信じてないのよ。」

「…………え？」

「だつてあなた達は障害者ですもの。何が根拠かもわからないし…
その……何て言つのかな？話そのものが信じられないの」

「じゃあ先生は……ボクが嘘ついてるとでも？」のウンコはボクがや

つたと……？

「セイちゃんにとっては違うかもしれないけど、先生にとってはあなたのモン」よ

「……。

ボクはスボンを脱ぎ、洗い出した。

涙が次から次へと溢れて来た。

ジャアアアアアア。

「何よ、泣く事ないじゃない……」

「……泣いてないモン」

「別に先生はセイちゃんをいじめてるんじゃないのよ? ただ、あなた達みたいな障害者の言つことをイチイチ信じたら、神経がいくつあっても足りないって言つてるの!」

「……もういいです。先生は先に教室に行つて下さい。ボクはこれ洗つてから行きますから……」

「あ・そう?じゃあ…早めに来てね…」

先生はその言葉を残し教室に戻っていた。

ボクはずっとそのズボンを洗っていた。

ジャバツバジヤバジヤボ

背後には人の気配を感じ、く目の前にある鏡を見る。

「……っ!!」

ボクの背後に女の人が笑つて立つていた。

026 ハイセツブツ（後書き）

お久しぶりです。

お待たせして申し訳ありません。ようやく連載再開です。
このまま完結まで突っ走って行きたいと思いますので
応援よろしくお願ひします！

ボクは背後にある女人に向かつて言った。

「オマエはナツコだな？ナツキお姉ちゃんが言つてた……」

「……んふふつ」

その女人はボクの嫌いな“鼻笑い”をした。

「……オマエがリュウちゃんをおかしくしたんだな？」

ボクは鏡越しに叫んだ。だが、その女人は

「……んふふつ」

と、また笑つた。

「一体何なんだ！何で突然ボク達の前に現れたんだー！おマエは誰だつー！」

「…………。」

女せゆつくつと近づいて来る。
ボクは鏡から田が離せなかつた。

「私はあなたの味方よ?」

「……え?」

「あなたをいじめてる全ての者から引いてあげる。クラスメイトや
リコචხանとか?…」

「…え?」

ボクはゆつくりと後ろを振り返つた。
だが、そこには女人の姿はなかつた。
鏡を見ると自分自身と映つていてゐる。

「……ボクをするへ!」

「ナウよ。…だから安心して」

「嘘だつて。コロウちゃんをあんなにしたのは前前の仕業じゃないか
…言ひられなによ!」

「……そう。わかった」

そう言つと女の人はゆっくりと消えて行つた。

「…………。」

ボクは後ろを見たが、やはり見えなかつた。

「……なんだよ。」

ガラララッ。

ボクが教室に戻ると、みんなの冷たい視線が突き刺さる。

「…………。」

「はい、みんなセイちゃんの事は気にしないで！授業を続けるわよ！」

先生の一言でみんな視線はボクから黒板に移つた。ボクは物音を立てぬよう自分の席に向かつた。

自分の席の椅子にはまだウンコが乗つたままだ。
ボクが踏んだせいで、平べつたくなつていた。

ボクはティッシュを取り出すとそれを拭ぐ。

「偉いわね！セイちゃんは…ちゃんと自分で後片付けするんだから…みんな拍手…！」

パチバチバチ：

先生のその一言でクラスのみんなは拍手をする。あまり、人に拍手をされた事のないボクは嬉しいんだか悲しいんだがわからない複雑な気持ちでウンコを撤去した。

「…ぱあ～か。」

萌ちゃんが言つ。

ボクは無視したまま作業を続けた。

もちろん、このウンコを椅子に置いたのは萌ちゃんだつてことくらいい予想はつく。

だが、ここで反抗してしまえば萌ちゃんの怒りは更に増し状況が悪化するのは目に見えるてる。

だからボクは我慢する。

「ふふふ…偉いな！ボクは！」

「ぶあ～かークソだークソだなーーオマエはーー」

「…………。」

「クソはさつわとトイレの中へ流れてしまふーそしてバキューム
カーに吸い込まれてしまえー！」

「…………！」

「…＼＼＼…萌ちゃんあなた言い過＼＼＼…＼＼＼…よ……」

先生が笑いを堪えながら注意する。
するとクラスメイトの一人が、

「バキュウムカーって何ですかー？」

「セイちゃんみたいなウン！」を掃除する車よー掃除機みたいなもの
！」

萌ちゃんが大声で説明する。

「あやははははーつ…おもしろーーー！」

「いひひひひ…」

「√HUF √HUF √HUF √HUF」

「ふらり ふらり ふらり ふらり」

みんなが笑い出す。

ツボにハマッた先生も我慢できず笑い出す。

「！」

「ねむねむねむねむね」

「...たたた」

「ハヤシヤ一郎」

「はせはせ」

「うわあうわあうわあ」

「あはははは」

何故かボクもつられて笑った。

そして笑いながら涙が止まらなかつた。

学校が終わるとボクは家に帰らずにナツキお姉ちゃんの家へ向かつた。

ガチャツ。

「どうしたの？セイちゃん？」

ボクの突然の訪問にナツキお姉ちゃんはびっくりしていた。
ボクはお姉ちゃんの顔を見ると涙が次から次へと溢れて来た。
悔しいやら寂しいやらで色々な感情が一気に押し寄せ我慢出来なかつた。

「お姉ちゃんー！」

ボクはお姉ちゃんに抱き着いた。

「…………。」

「うわあああーん」

姉ちゃんは何も言わず、「よし、よし」と頭を撫でてくれた。

だから

ボクは思い切り泣いた。

「ぶあひやひやひやひやひやひやひやひやひや…ひこ。見た?今の人
顔!びあひやひやひやひや…」

「セイちゃん、さつあまで泣いていたと思つたら今度は大笑い?」

「だつて…アホじゃない?」のテレビに出てる人」

「ただの歌番組なのに何故おかしいのかしら?」

ナツキお姉ちゃんはボクに呆れていた。

「そういえばナツキお姉ちゃん…今日、あの運転手が変な事言つて
たよ」

「え?」

「お姉ちゃんを……“犯した”って……」

「…………やつ。」

お姉ちゃんは返事をすると「一ヒーを飲んだ。

「カラダは大丈夫なの?」

「大丈夫よ。それくらいの覚悟は出来てたし……」

「ふうん。あ・それと…ナシコつていう女に話し掛けられた……。」

「……え? なんて! ?」

ナツキお姉ちゃんはボクに顔を近づけて聞いて来た。

「……ボクを……守るつて……」

「守る? 誰から?」

「ボクをいじめてる人達から……」

「いい！？セイちゃん！彼女を信じちゃダメよ！彼女は人の心の隙間に入り込むんだから！そこを利用してみんなを苦しめるのよ！」

「…………わかつてゐるお姉ちゃん……痛いよ……」

ボクの言葉に我に返り、

「あー……めん……強く掴み過ぎちゃったね

お姉ちゃんは掴んだ肩からゆきくつと手を離した。

そしてまた「一ヒーを飲む。

しばらくしてボクは家に帰った。
家にはママが飯を作っていた。

「セイちゃんおかえり！悪いんだけど、ママ仕事が入っちゃって
今から行かないといけなくなつたのー！」

「…………え？…………うん。」

ボクは学校での事を語りおつとしたが、急いで準備しているママを見て言え無かった。

ボクは行きたくない学校へ行こうと家のドアを開けた。

「行つてきまあ～す！」

奥からは返事がない。

ママはゆうべ遅く帰つて来たらしくまだ寝ていた。

朝ご飯はちゃんとテーブルに用意してあったのでそれを食べたのだ。
ボクはもう一度言った。

「行つてきまあ～す！」

「…………。」

やはり返事がなかつた。ボクはゆうべドアを閉め鍵をかけた。

ガチャン。

すみと背後から

「行つてらっしゃい」

と声がしたので振り返ると、セレーヌがやんのママがドアの隙間から手を振つて笑っていた。

「…………」

ボクは気持ち悪いので急ぎ足で下に降り、バスを待っていた。

バスがやって来てドアが開く。

もひるん、運転席には偽ナオキが笑つて迎える。

「…楽しい一日の始まりだよお」

ボクは無視して席に着く。

すると萌ちゃんが、

「おはよ。ウンローー今日も相変わらず臭いわねー。」

…と囁つて笑い出した。

「あやは～っははは」

「うん」じだつてよー

萌ちゃんだけじゃない…バスに乗つてるみんなも笑い出す。

「…………。」

「 もち セセセセセセ 」

「 あひや ひや ひや ひや 」

「 ふむむむむむむむ 」

……。

……はあ……疲れた。

……何やつてるんだろ?!

なんでボクは「こんな事して今まで生きなきゃならんんだろ?…

みんなの笑い声が小さくなつていぐ。

「 うやうやボクは眠たいみたいだ。」

「 そうだー!」のまま永遠に田が覚めなければいい…

…すつと覚めなければ…

すつ。

029 アダナティチャク

「セイくん！ セイくんってばー！」

「…え？」

先生の声でボクは目を覚ました。

「あなた朝から寝過ぎよー。とっくに学校に着いたわよー。早く降りな
やー！」

「…あ…じめんなさい…」

ボクは起き上がるとすぐ元バスを降りよつとした。

「…くくく…」

運転席から笑い声がする。

偽ナオキがずっと笑っていたが、ボクは無視して急いで教室へ向か
つた。

教室が目の前に見えるとボクはドアの方を見た。そこに『ワナ』が仕掛けられてないかどうか確認したが、何もない。

ガララ…。

教室のみんなが一斉にボクを見る。

ボクはゆっくり席に向かった。そして昨日と同じく近づいて臭つて來た。

「…………」

案の定、椅子にはウンコがあつた。

「…………。」

ボクはただじつとそれを見つめていた。

ガララ…。

先生が入って来た。

「ん? 臭いわねー。」

「先生ーーセイちゃんがまたおもひじを……」

萌ちゃんが言ひ。

「また! ? 昨日、あれほど言つたのに……。」

「違いますーボクじゃないー。」

ボクは必死に訴えた。

だが、先生は表情を変えず、

「昨日も言つたでしょ! みんなが何と言つとそれはセイちゃん
がやつたって……。」

「やうよーそんな臭いモノーれつれと捨てちゃつてー。」

「やうだーウン! だーこやせせせせせ……。」

「やうだーウン! だーこやせせせせせ……。」

「こひひひひひ……。」

「えへへへ……。」

「あーはつぱつぱつ…」

『一ノ山』

גַּם־לְבָנָה

「アカセサリーリスト」

クラスのみんなが口を開けて笑い出した。

みんな楽しそうに肩を震わせて いる。

7

ボクは我慢出来ず、教室を飛び出しトイレへ向かつた。

ガララツ

ダツダツダツダツ

גָּדוֹלָה

どんなに我慢しても涙が止まらなかつた。

ダッダッダッダッ

「……んふふ。」

トイレに着くとボクは鏡を見た。

「んふふ」

背後にナツコちゃんが立っていた。

「大丈夫よ？ 私が守つてあげるわ」

「……お前だつて信用できなーっ！」

「誰だつたら出来るの？……ママ？……ナツキお姉ちゃん？」

「…………。」

「それせじつかじらへママ……最近、家にいないでしょ？」

「…………え？」

「仕事が忙しくって……ホンキで信じてるの……？」

「…………？」

「まだわからないの？あなたから離れる唯一の楽しい時間だからよ？」

「…………？」

「だから、あなたなんて一一の次二の次つて事ー何が何でも仕事が大事つて」「アホー！あなたはママの仕事の邪魔つて事ー！」

「違つついー絶対ありえないー！」

「何故そつ言い切れるの？じゃあ……ナツキお姉ちゃんも信じられるの？」

「うさー、信じてるよー。」

「……んふふ……つい最近知り合った人をどんなして信じれるというの……？子供って単純で幸せだわね……きっと……この2人もあなたを裏切る時が来るわ……そんな時……私を呼びなさい……私があなたを助けてあげる……守つてあげるわ……」

「うるさいー！お前なんかの助けてなんかいらないやー！ばか！あほ！」

「……んふふ。」

女は笑うと消えて行つた。

「……はあ……はあ……」

ボクはしばらくトイレにいた。

でも誰も探しに来てくれない。

先生ですか。

だから仕方なく教室に戻つた。

もちろん、そこにはウン「がそのままあつてボクは泣きながら片付けた。

ブウウウゥン。

帰りのバスの中でボクはまた泣いていた。

涙が何故か止まらない。

ただ苦しくて仕方ないのだ。

バスが急停車する。

気付けばボク以外誰も乗つてないのだ。

「……？」

前にいる偽ナオキの笑い声が聞こえて來た。

「ハヘヘヘ…」

偽ナオキは立ち上がりボクに歩み寄つて来た。

「…? なに… ! ?」

ボクは意味が解らない事と恐怖で動けない。

「うへへへ…」

偽ナオキはジリジリと近づいて来る。

「前から思つてたんだよーお前を食べたい… とな…」

「……え?」

肩を強く掴まれ顔が近づいて来た。

「……ひつ

額にキスをしてきた。

ボクは意味がわからず、息をするのを忘れるくらい偽ナオキの顔を見ていた。

「……大丈夫！痛くなんかないよ……痛いのは最初だけだから」

「……え？ 痛いって？」

「……」

偽ナオキはポケットからあるモノを出した。

「これにハマッたら快感だぜ……つへへへ……」

ボクは睡を飲み込んだ。偽ナオキの出したそれは注射器だった。

「……いやだっ！」

「動くんじゃねえ！ぶつ殺されたいのか！？」

「……ひつ……」

ボクは声を必死に抑えた。

そして今度は震えが一気に襲いかかって来た。

ガタガタガタガタガタガタ

「……。」

ガタガタガタガタガタ

「……はあ～はあ～：大丈夫だつて……最初のチクツだけだ……その後は天国だぜ……はあ～はあ～」

「ううつやだ！」

ボクは首を横に振ったが、そんな抵抗もむなしく注射の針はボクの腕へ近づく。

ボクは思わず目をつぶつた。

「…………！」

「…………。」

「……なんだよー！」

偽ナオキが突然、叫ぶ。

ボクはびっくりして目を開けた。

偽ナオキは後ろの座席を見つめていた。

「…………？」

「だから何でそこでお前が邪魔するんだっ！ええ！あっち行けよ！」

偽ナオキはボクを放したかと思えば後ろの座席に向かって歩きだし、注射器を持った手を振り回していた。

「てめえ！ふざけた事ぬかしてんじゃねえ！殺されたいのか！ああ！なんで邪魔すんだよ！なんでそこにいんだよ！消えろ！消えちまえよ！」

偽ナオキは必死に手を振り回していた。

見えない敵をやつすようとしたのだ。

ボクは今が逃げるチャンスだと気付き、静かに後退りをした。

「いいからひつじんでろよーお前の出の幕はねーんだ… もちあああ
あああー！」

「……！」

偽ナオキを見ると振り回してた注射器が首に刺さっていた。

「てめえ… 一ょくせ… う… うわああああー…」

「…ひつ」

ボクは恐くなりその場から逃げた。

走って逃げた。

…タツタツタツ…

「…はあ…はあ…」

タツタツタツタツ

「……はあ……はあ……え？」

前にナツコが立っていた。

ボクはびっくりして足を止める。

「…………」

「だから言つたでしょ。わたしはあなたの味方だつて……」

「……もしかして……助けてくれた……？」

「んふふ……」

鼻笑いをするとナツコはまるみる消えて行つた。

「……あ。」

「…………。」

「そんなワケないでしょ!ー?ナツコが助けてくれた?まさか!」

ボクはナツキお姉ちゃんにわざの事を伝えた。

「ホントだよーもつ少しでもの偽ナオキに変な口とやれやうになつたんだモンーそれをナツコが…」

「セイサムー騙されないでこれもワナなのよーこれがナツコのやり方なのよ?」

「違う!ナツコは助けてくれた…ナツコは味方なんだよー前から現れては助けてあげるって言つてたモンー」

「…じゃあ…ココウちやんもあなたを助ける為に現れたって言こきれるのー?ナツコとココウちやんは仲間なのよ?」

「違つ!ココウちやんは悪者でナツコはイイ奴なんだ!」

「……セイウチちゃん？」

ナツキお姉ちゃんは先生みたいに呆れた様に溜息をした。

「……」

ボクはムカついた。

『鼻笑い』と『溜息』だけはボクがこの世で許せないもの。

ナツキお姉ちゃんまでもボクを馬鹿にしてる。

031 タレ?

「セイサ ん… お願いだからお姉ちゃんの髪の毛を信じて…」

「お姉ちゃん そ、ボクの髪の毛に嘘ついて…ナシコはいい奴だよ。」

「

「…………ふう。」

ボクはお姉ちゃんの溜息にムカついた。

「またしたー時々お姉ちゃんの溜息がムカつくんだよねー。」

「あ…」「あ…」

「ボク…帰る…」

やつれてボクはナシコお姉ちゃんの家を飛び出した。

「セイサ ん…」

遠くでボクを呼び止める声がしたがボクは無視した。

誰もボクが言つた事を信じない……

先生毛友達毛

ナツキお姉ちゃんも…

ガチャヤツ。

ボクは家に帰つて來た。相變わらずママはいなかつた。

『 ちびトイセーのたぐいがん…

電話の向こうでぎりぎりしてこるママがいる。ボクはよっぽどじやないことに電話しないからだの。)

「ママ、今すぐ帰つて来て。」

『……今は無理よ。もつ少し我慢して……』

「やだ！今すぐ帰つて来て！」

『どうしたの？今、ママ手が離せない仕事しているの…わかるでしょ？』

「でも帰つて来て！」

『わかった。早めに帰るよつてあるから…待つてて…』

電話を一方的に切られた。

「…………」

ボクは受話器を置くと部屋に入り窓の外を見つめた。
空模様は悪く今にも雨が降りそつだつた。

「あ～やだな。また雨か…」

ふと隣のベランダを見るといこくうちゃんのママがいたを見ていた。

「…………」

ボクに向かって手を振る。

ボクは気持ち悪いのでカーテンを閉め、ベッドに横たわった。

「…………。」

精神的に疲れ果てたボクは1分もしないうちに眠りについた。そして気付いた時には夜の10時を過ぎていた。

「…………ママ？」

ベッドから起き上がるなりボクは部屋を出た。

まだママは帰つて来てなかった。

「早く帰るつて言つたクセに……」

ボクはソファに座り込む。

「…………。」

「…まさか！」

ボクはふとナツコの言葉を思い出した。

“…あなたのママもいざれ裏切る時が来るわ…”

（…まさか…でもナツキお姉ちゃんは…やつぱりボクの言ひことを信じなかつたし…）

ボクは考えれば考える程恐くなり妙な孤独感に包まれた。そしてソファから立ち上がり家を出る。

ガチャッ。

エレベーターに乗り、下へ降りた。

「オオオオオオオオ～ッ

「…………。」

1階に着ぐ。

ボクは外でママを待つ事にした。

家では落ち着かないからだ。

雨はそんなに降ってはいなかつたが気温が低く少し肌寒かつた。

「……ママ……早く帰つて来て……」

ボクは独り言をポツリと言つた。

「…………。」

ボクは向氣にある場所に目をやつた。

それはこのマンションのポスト。

部屋の数だけのポストが並んでる。

自分の家のポストを開けてみると中には何もなかつた。

次に隣のリュウちゃん家のも見てみるとこっちも何もない。

今度はナツキお姉ちゃん家のポストを覗いて見た。

中には一通の封筒。

ボクは手に取り、裏も見た。

「…………え？」

ボクは自分の目を疑つた。いくらボクが頭悪いからって少しの字くらいは読めるや。

これは読み間違いではない。

絶対そう書いてあるんだ…。

“ナツキより”

(…いくら何でも自分に手紙書かないよね?)

ボクが封筒を見つめていると背後から物音がした。

「セイ…くん？」

ナツキお姉ちゃんが変な顔をしてボクを見つめていた。

「……いや、どうこうの事、まさか、自分で手紙なんて書かないよね？」

「……自分で書いたのよ？よく見て！宛名は叔母さんの名前になつてゐるじゃ～！」せわたしの嫁ではなくて叔母さんの嫁だもの。」

「…………。」

ボクは勝手に封を切り中の手紙を取り出した。

「ダメっ！」

ナツキお姉ちゃんはすぐボクから手紙を奪い取るが、遅かった。手紙はシンプルにこう書かれていた。

“ もうすぐ向かいます。 ”

「……もうすぐ向かいます？それ、どうこうの意味？」

「簡単な事よ。わたしが叔母さんの家に向かつて事よ。ここには
いない事になつてるし……」

「嘘だつ！外によくいたじゃないか！隠れてる様子もないしつ……」

「……本道よー信じてー。」

ゆつくりと近づいてくるナシキお姉ちゃんが恐くなつたボクは後退
りをして、走り出した。

「セイくんー！」

タツタツタツ……

ボクは階段から上へ上がつた。そして家に入りドアを閉め鍵をかけ
た。

ガチャツ。

「……はあ……はあ……」

ボクが呼吸を整えるとチャイムがなつた。

ピンポン

「 -えー？」

ボクは息を止めた。

ピンポン

またチャイムがなる。

「 。」

ボクはドアに向って近づきスープを覗いていたドアの向こうから声が聞こえて来た。

「 ... ニュウチャーン わたし... ママよ...」

「 ... エ?」

「ボクは足を止めた。

「『飯まだでしょ？ママが作って来たの…』リュウちゃんの好きなハンバーグよ…？」

ドアの向こうはリュウちゃんのママ。ボクはそこから動けずドアをじっと見つめている。

ガチャツ　ガチャツ

「……！」

リュウちゃんのママはドアを開けようとしていた。

ガチャツ　ガチャツ
ガチャツ　ガチャツ

「…開けてリュウ！…あなたの好きなハンバーグよ…？」

「違うつー！ボクはリュウちゃんじゃない！ボクが好きなモノはハン

バーグじゃなくてスペゲティーだつ！

「嘘よ！あなたハンバーグが好きだつたじやない！ママの作ったハンバーグが…」

ガチャツ ガチャ

「だからボクはリコウちゃんじやないって言つてるだろ！」

ガチャ ガチャ

「どうして？どうしてそんな嘘つくな…リコウちゃんはそんな子じやないでしょ？…ママ怒つたわ…！」

「…………？」

ドンッ！

「わっ！」

「開けなさいっ！…でもないとこ」のドアをブチ壊してやるわよっ！」

ドンッ

ドンッ

「……ひつ」

ガチャ ガチャ ガチャ

「開けないさいっ！開けなさいったらっ…ほらっ！早く開けなさい
！ただ開けるだけでいいのよっ！…ほらっ…このドアを開けなさい
！ほらっ！早くっ！」

ドンッ ドンッ ドンッ

ガチャ ガチャ！ガチャ！

「…ひつ…！」

ドン！ ドン！ ドン！

ガチャ ガチャ ガチャ

「ホラツ！アケナサイ！アケナサイツティツテルデショウ！ホラツ！アケテ！アケテツテイツテルダロオウガ！アケロオオオ」

ドン！ ドン！ ドン！ ドン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ドン！ ドン！ ドン！ ドン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ドン！ ドン！ ドン！ ドン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ボクはただ耳を塞いでいた。

033 イカリノテッケン

「……ちやん!」

「……セイちゃん!」

「セイちゃんてば」

遠くから聞こえて来る声にボクの視界は黒から白へと変わつていぐ。

「……ん」

「大丈夫なのー?どうしてこんなトコで寝てるの?大丈夫?」

「……え?……うん」

ビーッや、ボクはそのまま玄関で寝ていたようだ。

「良かった。何ともないみたい。」「あんねママがあそくなつたから
……今、お婆さんも一緒になの……」

「...」

眠い目をこすりながらママの後ろに立っているお客さんを見ると、
男の人だつた。

「初めまして……君が誠一郎なんだね……？」

「うん。」

「キーナのママとは最近知り合って仲良くなっちゃったてるんだ。よろしくね……」

「あ、どうぞ。ハイハイ一杯くらい飲んで帰らなければ…？」

「いいの？」

「やあねえーんのつもつでいいよで連れて来たんですか?...え?」

卷之三

…なんだか、いつもママじゃなかつた。

ボクは語つた。

最近のママの帰りが遅いのはこの男の人と会つてからだ…。

男の人はソファに座ると家の中をマジマジと覗渡していた。ボクはコーヒーを用意してあるママの隣に立ち、問い合わせた。

「…ねえ、ママ。あの人が好きなの？」

「やっ。もう何言つてんのセイちゃん…。」

ママはすまいで照れていた。

「セイで知り合つたの？」

「…よ。家にたまたま来たのよ。ほひ、リコウひきんが現れ
たあと。」

「…えー?」

ボクは嫌な予感がした。

「超常現象に詳しい方なのよ。コロナウイルスの事相談のつもりつてたの。」

「オオトモナオキ？」

「あらー？ 何でわかつたの？」

「ママ… 前にパソコンで見てたじゃない？ でも… か… 顔が違つ…

「ねやとみたいよ。顔がバレるのは駄目ひへつて… でも顔を出すないと信用できないじゃない？だから助手さんの顔を使つてるらしいのね… あ・」めん。トイレ行ってくる。」

「……。」

ボクは唾を飲み込んだ。

あの… 運転手はやはりニセモノで今ここののがホンモノ。

まさか… こんなカタチで本物のナオキと会つなんて…。
気付けばママの姿は無かった。

「…………。」

「そんなに恐いか？」

その声に反応した時、ナオキの顔が田の前にあつた。

「…………。」

「初…対面…だな？近くでみるとガタイいいな。そつだよな？お前
これでも17だしな…くくく。」

「…お前が…リュウちゃんを殺したんだな？」

「…ばか言え。リュウを殺したがつてたのは両親だ。俺はそれを手
助けただけだ。なんでお前に俺を責める義務がある？お前だつて
望んだクセに。」

「…やうこつ時もあつた…でもまさか本当になるなんて…」

「体はデカくても頭はガキだしな…障害者まつらいねえ…あのニセ
ナツキにも言つとくんだな、俺の邪魔するなーって。」のままだと
お前のママの命はないぞ。」

「ママは関係ない！」

「何言つてんだ。お前のママの前にひとりの女だぜ。ママが俺にホレたり関係ないワケないだろ？ましてや体の関係を持つたらなおさらだ。それにママはお前の事で疲れ切つてる……だから俺みたいな男が必要なんだ……俺がママの疲れを癒してやるんだ……体でな……わたしはあなたの口のスキマをお埋めします。オーホッホッホッ……」

バキッ。

ドサツ。

『気付けばボクはナオキの顔を殴っていた。
運悪くその瞬間をママに見られた。』

「セイちゃん！なんて事をするのー。」

「……はあ……はあ……」

ママが青ざめた顔でナオキに駆け寄る。

「大丈夫ですか？ナオキさんっ！」

「…はあ…はあ…」

ニセナオキは俺の顔を見るとニヤついていた。

ボクは初めて本気で人を殴った。

今までリュウちゃんとケンカをよくしたけれど、自分から手を出さんて…殴るなんて出来なかつた。

けど、今回は違う。

こいつは殴らなくてはいけない人。

絶対悪い奴だつてわかつてゐ！

なのに…

なのごどつしてママはボクを変な目で見るの？

「セイちゃん…ママショックよ！まさか初対面の人には暴力ふるうなんて…ナオキさんが優しい人だから良かつたけど普通の人だつたらセイちゃん…殴り返されてあなたも怪我するトコだつたのよ！笑つて帰つてくれたけど…」

！

ママはボクに呆れた様に言つた。

「…最近、帰りが遅いのもあの男のせいなの？仕事が忙しいって嘘だつたの？」

「嘘じゃないわよー何でそんな事を言つのー。」

「…ママ…あの人リュウちゃんを殺したって言つたり信じる?」

「何言つてゐのーあの人は私達を救う為に現れたんじゃない。」

「違うーあいつがリュウちゃんを殺したんだっ！ボクにはわかるつ

ー！」

「セイちゃん…もういい加減にしてー口を開けばリュウちゃんリュウちゃんつて…ママ疲れたわ…」

「だつてホントなんだモンー他にビビつ言えばここのー？」

「…お願いだから…もう一度とリュウちゃんの名前を口こしないで

つー

ママはあまり怒らないが疲れていたせいか大声でボクに怒鳴り付けてた。

ボクはあまりにびっくりして田からは涙が溢れて来た。
だが、ボクはそこで負けるワケには行かなかつた。

ママを守る為にママを納得させなくては

「…お願いだから信じて…ボクは…ひっく…嘘をつい…てない！…
ひっく…あの男は危険なんだ…ひっく…リュウちゃんは…あの男…

ひっく……殺されて……ひっく……幽靈になつた……んだよ……ひっく……

バシッ！

マイマはボクの頬をぶつた。

「ココウちあんの前まわなこでつて言つたでしょ……分からな
いナホー……」

「…………」

「……おひでに話題になんない。遅いからやつせと寝なきゃ……明日も学校で
じょ……」

「……う……ひっく……う……ひっく……ママも騒つてるとんでもしちゃ……ひっく
……どうせ……ボクなんか……障害者だつて……まともな人間じゃな……つて
……ひっく……思つてゐんでしょ……ボクなんか生まなきゃ良かったつ
て……」

「……ばかっ……ママがそんな事いつ言つた? 私はセイちゃんが元氣でい
てくれればいいって……それだけでいいのに何でわかつてくれないので
い……」

ボクはゆっくりと自分の部屋へ向かつた。

後ろでママがボクを呼んでるが振り返る元気も無かつた。

ボクは一瞬にして無気力になつた。

そして部屋に入る。

バタン。

どんなに堪えようとしても涙は止まらなかつた。もはつボクには何も信じるものがないと氣付いてしまつた。

ボクはただ泣くしかなかつた。

-翌朝 -

ボクはママと一緒に話さなかつた。ママから声を掛けられてもせず無視していた。

「行つてらつしゃい……氣をつかるのよ……」

「……。」

ボクは無言のままドアを開け閉める。

バタン。

ドアを見ていたがママが開ける気配はなかつた。

「……フンだ！」

ボクはエレベーターへ向かおひと歩きだした。

ガチャツ。

ドアの開く音がした。

ボクはママだと思つて振り向いたが開いたのは隣のリュウちゃん家のドアだった。

中にはいつも立つてこるリュウちゃんのママではなくパパだった。

「……。」

あるとリュウちゃんのパパは笑顔でこいつ言った。

「……セイちゃん、わるこがリュウも一緒に学校へ連れてってくれないか？」

「……え？」

「おーい、リュウー早く仕度しないか！」

「ココからセイさんのパパは家中に向かって叫んだ。

すると…

「……うん…セイちゃん」うち来てHー。」

家中から聞き覚えのある声がした。

これは紛れも無くリュウちゃんの声だった。

「ホラ、呼んでるわ。リュウが…」

そう言ってリュウちゃんのパパはボクを笑顔で見つめた。

035 ハウショク

「ハーハーン…向かってゐるー? 早くおこでよ。」

「…………」

何度も聞いてもリュウちゃんの声だった。

「なんで? リュウちゃんはおじさんとおばさんがベランダからボイ
捨てして死んだじゃないか…」

「…? 何を言つてゐる? リュウは死んでなんかいない… 何でおじさん
がリュウを殺す必要がある?」

「… やはりあああん

ドタドタドタ

家の奥から足音がこぼれに向かって流がして、ボクは恐くなつて逃
げ出した。

「うわああああああっー。」

「おいつセイちゃん！」

タツタツタツタツ。

リュウちゃんのパパはボクを呼び止めたが恐くなつたボクはそのままエレベーターに乗つた。

「……はあ……はあ……」

「オオオオオオオオオオ～ッ

「……はあ……はあ……」

『おん。

「……え？」

Hレバーターが止まる。上の表示を見ると四階で点滅していた。

そしてドアが開く。

「……」

ドアの向こうにナツキお姉ちゃんが立っていた。

「……わたしの話を聞いてーセイちゃん…」

「いやだつーどーせお前も仲間だる?おかしいと思つたんだ!だつてニセナオキに犯されたつてのに平氣な顔してんし…」

「聞いてー確かにわたしは本物のナツキさんではないわ。でもナオキの仲間ではない!それだけは信じて…」

「うわあああああああ」

ボクはニセナオキお姉ちゃんを突き飛ばし階段で下まで一気に降りた。

「……はあ……はあ……わからない……死んでたはずのリュウちゃんは生き
てて……ナツキお姉ちゃんは偽物で……本物のナオキは現れて……ママは
そのナオキが好きで……はあ……はあ……はあ……頭の悪いボクじや……どう
していいのかわからないよ……誰か……だれか助けて!……助けて!……

ボクはバス停へ向かつた。

「あーはつはつはつはつ

「…………。」

「あーはつはつ。」りやおかしいな。セイの奴、ホントにリュウが
いると思ってやがる。ただリュウが映っているビデオの音量を上げ
ただけなのに……走つて逃げてつたぜ。」

「…………。」

「おい、まさかまだあいつをリュウだと思ってないだろうな?いい
か?リュウは死んだんだ。俺達がベランダから落としたんだ」

「何言つてゐるの…リュウは死んでないわ！」

「死んだよ！俺達が殺した！あいつは毎日「死にたい」って言つて笑いながらな…わかってるだろ？人を困らせる神経しかなかつた…リュウはそういう障害だった。お前だつて毎日泣いてたじやないか…なんでリュウが死んだことを認めない…リュウは…大人になつてはいけなかつたんだつ…！」

「…………。」

「正直…ホッとしたよ。リュウがいなくなつて…生憎、警察には俺達がやつたとバレてない。」

「…………ふふ。」

「…………？なあ、俺達は今からまた新しい子供作つて新しい生活を始めるんだ。死んだリュウもそれを望んでるはず…」

「…ふふ、あの人の言つたとおりだわ…」

「…誰だ？あの人つて…」

「わからない。突然、現れたの…髪の長い女の人…これであなた

を殺せつて…」

「……何を……？」

「私はリコウを取り返す為に戦つわ…まずは邪魔なあなたから…」

「何馬鹿な事を…誰だ…お前だれに話したんだつー言つたのか?リコウのこと…」

「…しね…」

「おいつ…いい加減にしないかつ！」

「しねえええええええええええええええええええええええええええ
エ～ツ！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！えええ～い！死んでくれ
えええ～うう～えいつ！くつ～ええいつ～やあつ！～くくつ～んん
！～えいつ～えいつ～えいつ～えいつ～えいつ～」

バスがやって来た。

ぶつううう～ン。

キイツ。

そしてバスの扉が開く。

「……。」

ボクは二セナオキに会うのが恐かつたが勇気を出してバスに乗った。
ところがいつもいるはずの二セナオキの姿はなく、別の男の人ぐる
転席にいた。

「……！？」

ボクは運転席をじつと見つめながら歩いていたので誰かに足を引
っ掛けられてコケてしまった。

ドサッ。

「……！」

「アマハラニ」

「馬鹿だ、馬鹿！」

「レバシラシ」

卷之三

ボクはゆっくりと立ち上がり埃を掃づ。

「強がつけつてーホントは今にも泣きたいくんじゅー。ママの脇でねーづふふふふふ…」

萌ちゃんは相変わらず包帯だらけでボクに文句を言った。ボクは無視して席に座る。

「あたしを無視する気? アンタみたいのをへソ曲がりって言ひのよ
! デベソ!」

「うるさいー！ボクはデベソじゃないぞー！」

「『トベソーナーお前のかあさん』トベソーナー

「、うぬれこつー。」

ベシツー。

ボクは頭に来て萌ちゃんの頭を呪じた。

「いたあいーいたいよーせんせーー！セイちゃんが…セイちゃんが
萌の頭を…うええええーん

萌ちゃんが泣きだし、先生がやつて来る。

「セイちゃんーあなた男の子でしょ！女の方を泣かしちゃこま
せんー大丈夫？萌ちゃん…」

「だつてー萌ちゃんがボクのママが『トベソーナー

「『トベソーナー』だつていいじゃない…何が嫌なの？もひ…包帯撒いてる頭
を呪いぢや誰だつて痛いわよ！ホラ謝りなさいー！」

「先に言つたのは萌ちゃんだよー。」

「先に呴いたのはセイちゃんでしょう。ホラ、謝りなさい。」

「…………。」

「なに黙つてゐるの。謝るだけでいいのよ。せりあー。」

「…………。」

「もういいわー……まともな人間なのに謝るけど……萌ちゃん、痛かったねえーだけど……もう泣かないで……ね？」

「ひっく……うん。」

先生は優しい顔で萌ちゃんをみていた。

……ボクは面白く無かつた。

ただ黙つて窓の外を見ていた。

学校に着くと、先生に呼ばれた。

「セイウちゃん！」

「……はい？」

「……あなた……みんなワザとやつてゐるでしょ？さつきのバスの中での事、教室でウンコ漏らしたり。あなたリュウちゃんの真似してゐるつもりなの？」

「違つ！ボクは何もしてない…どうして信じてくれないの…？」

「誰があなた達みたいな障害者を信じるってのよ…。仮にセイウちゃん以外の人がやつたとしても教室でウンコするようなアタマよ！そんなに先生の事が嫌い？…リュウちゃんもそうだった…いつも私を困らせる様な事ばかりを…だから…少し嬉しかった…リュウちゃんが死んでくれて。あなたもそうなつてくれれば…先生…嬉しいわ…」

「…………！」

先生は小声で言つた後、教室へ向かつた。

ボクはトイレへ向かつた。

ГЛАВА IV

そして、涙が溢れた。

「……………」

どんなに堪えても次から次へと涙が溢れ、声が洩れてしまう。

「……………も……………何……………も……………リュウちゃん
も萌ちゃんも先生もナツキお姉ちゃんも一セナオキも本物のナオキ
もリュウちゃんのパパとママも…ママも…なにもかも…ひとつくへ
えぐつ…全部いやだああああああ～つ…うえええええええ～ん

ボクはついに大声で泣いた。声がトイレで響く。

「んふふ！」

鼻で笑う声が聞こえた。

ナシノ
.....

「セイウちゃん…わたし…手伝わせて…問題が一気に解決するわ…」

「…？」ホントに？でも本当に全部お前がやつたんだろう？

ボクはナシコにさう言った。

長い髪で顔が見えないがナシコは首を横に振った。

「違う。全部リュウちゃんの仕業よ？あなただけリュウちゃんがどんな人間かわかつて来たはずよ。あなたのしらないところでみんなを困らせていた…それは幽霊になつても変わつてないわ…」

「わ…リュウちゃんの家で声を聞いた…やつぱりあれは一セモノなの？」

「リュウちゃんは確かに死んだわ。それは先生が言った様にあなた以外みんなが望んでいたから。だから私は手伝つてあげたの…リュウちゃんのパパもママも疲れ切つていた。私はほんのちょっと手を差し延べただけ。」

「でもかえつて悪化してんじゃないか！幽霊になつたリュウちゃんが今はみんなを苦しめてる…」

「ナレ」からはあなた次第よ？私は『つゝつかやんが死んで欲しい』とこゝの願いを叶えてあげただけ。その続きをあなたが願えればいいのよ。」

「え？ じやあ……つゝつかやんを天国に行かせてあげて……！ 成仏させ
て……」

「…………わかった。」

それに気付いたボクは自分でどうにかしなくては…といつ結論に達した。

ウジウジしたつて何も始まらないのだ。

ボクは深呼吸し、教室に入った。

ガララ…。

「…………。」

みんなの冷たい視線がまた突き刺さる。
でもボクは気にしないように席に向かった。

そして、めずらしく椅子の上にはウンコがなかつた。

ボクは少し嬉しくなり椅子に座ると、みんながクスクスと笑う。

「…？」

ボクはよくわからなかつたが、先生が来るのをまつていた。

ガララ…。

先生が入って来た。

「みんな、おはよつ！」わこわこ。……誰？！こんな事したの？！」

先生は入ってくるなり怒鳴り出した。よく見ると教壇の上にウンコがあつた。

「…あつー。」

ボクは思わず叫んだ。

先生が「うわ」と見る。

「またあなたね？セイちゃん！」

「ち・違こまかー。」

先生はズカズカとボクの前にやつて来てはビンタをした。

バシッ。

「今度といつ今度は許さないつ！」

「先生っ！ボクじゃないよお」

バシッ。

「…何で…何で嘘ついて…かわ…」

バシッ！

ビシッ！

「先生を馬鹿にしてつ」

先生は涙を流しながらボクを殴っていた。

バシツ

ビシツ

ボクの唇の横が先生の爪によつて切れ、血が飛び散る。

「...。」
「...。」

ビシッ

バシッ

先生の涙を見たボクはもうどうでもよくなつて黙つていた。

どうせ誰もかばってくれないし。

なかなか叩くのを辞めないのでボクの意識はもうひとつとして来た。

ガララ。

いきなり、教室のドアが開いた。

「……！」

みんなが一気にドアの方を見る。

一人の男が立つていた。

「…あつ。」

ボクは頭がクラクラになりながらも叫んだ。

だってそこに立っていたのは一セナオキだつたから。

先生はボクを後ろに隠し笑顔で

「……ナオキさん…今日はどうして来なかつたのですか?代わりに他の人が運転したのですよ?」

先生はゆっくりとナオキの方へ歩いて行つた。

「……はあ…はあ…すいません…具合が悪かつたもので…は
あ…はあ…」

「大丈夫ですか?ホント顔色悪いですよ。」

「…はあ…はあ…」

「…ナオキさん?」

「…はあ…はあ…」

「…ぐぐつー」

突然、先生が奇声を上げた。

「…ぐぐぐぐつーんぎゅるるいううう…」

その瞬間、一気に真っ赤な噴水が先生の首から見えた。

「…へ?」

ドサッ。

先生は首を押さえ倒れ込む。

「…先生ー」

「...くひひひひ...あひやひやひやひやひやひやひや」

ニセナオキが大笑いしていた。

038 パニック

「……」

「あひやひやひやひや！みんな見ろよー電池の切れかかつたオモチヤだよ～う。これを！」すると……な

ニセナオキは手に持つている血のついた鋭いナイフを先生に向か、

ザクッ。

……と、お腹に突き刺した。

「ぐうわっ！」

先生はまた奇声を上げ、体を痙攣させていた。

「…………。」

ボクと教室にいるみんなは黙つたままポカンとしていた。

ザクツ

גָּדְעָן

ニセナオキは手を降ろしては上げ、降ろしてはまた上げた。その度に先生の体は小刻みに揺れ、着ている服は返り血で次第に赤く染まつて行つた。

「……おは」

「... もせせせ」

突然、クラスの一人が笑い出した。しかも、楽しそうに手を叩いてだ。

「あひやひや…面白じだらー？今、笑ったキリハリがに来て、」
キリハリもやいせてあげよ。」

「うそーあはは…」

すると、その子は立ち上がりニセナオキの前までトコトコと歩み寄つた。ニセナオキは一瞬ながらその子に血の付いたナイフをゆっくりと渡す。

「…………。」

「ここか、こいつやつて持つていいあるんだよー。」

ニセナオキはすばやくその子の首にナイフを向け深く突き刺した。

ズブブ。

「……ひぐり」

その子は皿を大きく開き、舌が飛び出るくらい口を開けていた。

ナイフが喉を貫通している為声が出ない。

「あひやひやひや

一セナオキは楽しそうに笑いナイフを引き抜いた。

ブシュシュシュ

大量の血が噴き出した。

「うわああああああん

一人の子が叫ぶ。その声にみんなビクッとした。

ニセナオキが顔を強張らせ、

「うわあ…じゃねえんだよ！静かにしてくれないか？」

タツタツタツ。

ザクッ ザクッ

「うわああ……あ

ドサッ。

叫んだ子は刺され倒れ込んだ。

「あひやひやひやひやひや、この子も電池切れ…さあ…次はどの子かなあ？」

「…ひいつ。」

「うう」

ガタタタッ。

「わあああつ」

一人の子が席を立ち廊下に出ようとした。

「…じりつ待てつ」

だが、身体が不自由な為動きが鈍くてすぐに捕まれる。

「うわあああっ！たすけてえ！」

ザクッ。

「ああああつ

「お前はめつた刺しだ。」

ニセナオキはその子を力強く寝かせ、その上から思い切り素早く何回もナイフを上下に動かした。

ザクッ。サクッ。ドスッ。ザグザグザグザグザグザグ。サクツ。ザグッ。ぐぞぐぞぐぞぐぞぐぞぐぞ

「……う……あ……あ……う……」

セントの子は上を見たまま動かなくなつた。

「……まあ……まあ……まあ……まあ……次はどこつだ？」

「……。」

「……まあ……まあ……まあ……まあ……」

ガタッ

デアに一瞬近く子が立ち上がりデアから逃げようとした。

ガラ。

「たすけつ……て……」

ドサッ。

ニセナオキが投げたナイフが背中に命中し、ドアを開け切る前に倒れた。

「あひやひやひや。今のウマカッたね！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

みんな今にも泣きだしちゃつた。もちろんボクも。

039 パニック2

「ほりあ、泣きたいヤツいるかあ？少しでも泣いて見ろ…死・ぬ・
サ。

「…ひいっくー。」

「…ううー。」

声が洩れそうになつた子はみんな口を押さえていた。

「…ううー。」

「…ひいー。」

「…んんー。」

「…あひやひやひや。みんな震えてるねえ～ブルブルと…ブルブル
と…ブルルルルルル」

一セナオキは脣を空氣で震わせ何故か回転していた。

「ひやつほー！んー！サイコーだあー！持ちこいぞおおおーっ

そして誰もいない場所にナイフを振り飾していた。

シユツ シユツ シユツ

シャツ シヤツ シヤツ

「ヒヤツホオ！」

足を地面でバタバタさせ、まるで音楽に合わせて踊ってるかの様だった。

「萌ひやあああ～ん」

「セナオキは氣色悪い声で萌ひやんの顔に近づく。

「キミ、いつもセイちゃんをいじめていたよね～？バスの中とか…教室のウンコ事件とかさあ～。セイちゃんが俺に言つてたよ。萌ちやんが嫌いだつてわー殺して欲しいつてさー。」

萌ちやんはその言葉を聞いてボクの方を見た。

ボクは慌てて否定する。

「違つ！ボク何も…」

「…アンタ…せっぱりクズだわーアンタがいるとみんな死ぬわー！」

萌ちやんはボクをすくへ睨んでいた。

「せりあ またあ」

「……」

「セナオキは萌ちゃんの唇をつまみ弓張った。

「……わづへ悪こね口ひかりでひきね~」

「セナオキはあつといつ間に摘んだ唇をナイフで切り取る。

「……わづああああつぶー。」

痛みで叫びとした萌ちゃんの口を塞ぐ、

「言ひ声は……禁物」

「セナオキは靴を脱ぎ、靴下を脱いで、萌ちゃんの口に呑み込んだ。

「……ふふふ。」

そして、萌ちゃんの顔の前に尻を突き出した。

「萌ちゃん、あああん、俺のウソコたべるうーっ。」

「んんんー。」

必死に首を横に振る萌ちゃん。

「あひやひやひや。冗談だよおーん。」

笑いながら一セナオキは萌ちゃんを抱き上げ、教壇にあるパンパンの顔を思い切りぶつけた。

「ゴンッ！」

鈍い音が教室に響く。

「あ・ソレ もう一回」

「ゴンッ。」

「ゴンッ。」

「んばあああー！」

萌ちゃんの鼻は変形し、額から血が流れ、顔はウンコまみれになっていた。

前の怪我で巻いていた包帯も血で真っ赤に滲んでいた。

「あひやひやひや。セイちゃんあん… 良かつたねーこれで誰もいじめる人いなくなるよお~」

「…………あ。」

ボクは言葉が出なかつた。

「これも電池切れ。」

ドサッ。

萌ちゃんを「」の様に放り投げたニセナオキは小走りにボクの隣に座つてゐる子の頭を掴み出す。

ガシッ。

「うわっ。」

無理矢理引っ張り、景色が綺麗に見える窓ガラスへ力まかせに投げ付ける。

「ゴォン。

「ピシツ。

衝動でガラスにヒビが入った。

「…もういいかい！」

「ゴン。

ガシャアアアアアアーン

ガラスは勢いよく割れ、近くの席に座つてた男の子の目に無数の破片が入る。

「ああああああ！」

「うわああああっ！」

「ええええん！」

残りの生徒達が叫び声を上げ、パニック状態になった。

「はい、電池切れ。」

一セナオキは掴んでたその子を窓から放り投げた。

「……ひつ」

ボクはその光景を見てリュウちゃんが『ポイ捨て』された事を思い

出した。

ガララ..

ガラツ。

ガタタツ。

三人の生徒が逃げようと一斉に立ち上がった。

「待てっコラ！」

ザクッ。

「うわあああああ

ドスッ。

「うひ

一セナオキは華麗にナイフを振り回す。

シユツ :

ぶしゅううう…

首を切られた子の血がボクの顔にかかる。

「うわっ

「あひやひやひや…あと5人だ…」

「……何これ？首から血が……」んなにたぐせんはあはあ……」

「…………」

「……はあ……はあ……た……すけ……」

どやつ。

「うええええええん」

一人の子が泣き出す。

「瓶を上げるなつて言つてゐるだろ？」

「キツ。

「セナオキは泣いてる子の首を捻った。

じゃあ。

「うわあ

また別の子が逃げ出せりと歩き出すが、床にまみれている血で滑る。

「…あつー。」

『ノンニ。

ロッカーの角に頭をぶつけ倒れ込んだ。

「あむむくさつー。」

「……。」

だが、あゆむくんはあのまま動かなかつた。

「あひやひやひや、さすが障害者！滅多な死に方しないねえ……」

「！」の野郎！」

一セナオキの背後に座っていた子が立ち上がり、一セナオキに向かつて殴り掛かつて來た。

だが、一セナオキはいとも簡単にその攻撃を避け、キックをした。

「あちよ～」

ドガッ

「……うわっ！」

割れた窓ガラスへ体勢を崩す。

ニセナオキはスキを見てその子の両足を持ち上げる。

「うわあああ

そのまま落ちて行った。

「あとはお前とお前だ！」

そう言ってボクともう一人の子を指差した。

「……！」

ボクはもう一人の子の手を引っ張り、

「一緒に逃げよう！」

「……うん……」

ボクとその子は同時にドアに向かって走り出した。

ダッ！

「…待てっー逃がさんぞーーひらあーー」

一セナオキは素早く持つてゐるナイフを振り落とす。

ちよひどい、ボクとその子の間に。

トスツ。

「……ー。」

「わああああっ」

友達は手首から切断され、ボクは残された手を握つたままだった。

「ぎゅうっ！」

「セイちゃん…ボクの手が…手が…うう…」

ボトボトと手首から血が流れだす。一瞬にしてその子の背後にニーセナオキは立ち、

「…可哀相に…だから…死ね…」

ザクッ

「…」

「なんなんでみんなを」

ボクは震える声で聞いた。

「……それが……お前の望みだから……わ……」

「違う！ボクはみんな死んで欲しいなんて…嫌いだけど、死んでくれなんて…」

「リュウが成仏して欲しいんだろ?」

一
二

「お前が苦しめばリュウは成仏する…今度はお前のママの番だ…」

「……え！？」

ニセナオキは窓に向かつて走りだし、そのまま消えた。

ボクはすぐに窓を見ると下には一セナオキと一セナオキによつて落とされた生徒が横たわっていた。

「……………」

ピンポン

「……はあ～い。」

ガチャッ。

「お久しへり。」

「……………」

家の前に立つママやさんのママが笑顔で立っていた。

『？』

041 キンパク

タツタツタツタツ

「…はあ…はあ…はあ…はあ…」

タツタツタツ

ボクは無我夢中で家に向かつて走っていた。

「…はあ…はあ…はあ…はあ…」

一セナオキの最期の言葉。

「次はお前のママの番だ」

今度はママを狙つ氣だ……早く……早く家に着かなせやーー早くーー早くーー！

タツタツタツ

マンションが見えた。

ボクはすかさずエレベーターに向かう。

ガダン。

「オオオオオオオオオーン

「……はあ……はあ……はあ」

エレベーターが6階に着くとボクはドアをこじ開ける様にして飛び出た。

「……くつ」

タツタツタツタツ

ガチャツ

家のドアを開けるとすぐ正面のドアを開け中にに入った。

「…ママー」

…ダダダダ…

「ママー」

ダダダ

ガチャツ

「…ママー」

ダダダダ

「…？」

どこを探してもママの姿はない。

残りはボクの部屋だけだった。

「……。」

ガチャツ

「……。」

ママはボクのベッドで寝ていた。

目と口は半開き、服は血が広がった様に真っ赤に染まっていた。

「ママー。」

ボクはママに謝る。

「ママー起きなーおまー起きなー」

「ママーおまー起きなーおまー起きなー」

一セナオキと同じ様に鋭いナイフを持ったリュウちゃんのママが立つていた。

「……」

「どうしてわかつてくれなーのー！わたしがママだって言つてゐるの
こ……もん……どうしてなのー！」

「……おまんさんがママをママを殺したのー？」

「…」このママは横の壁を思つたり蹴飛ばす。

『コンツー！

ボクはびっくりして声が出なかつた。

「…この女はね…わたしからあなたを奪つたのよ…だから罷を取る
てやつたの…あなただつてそういう望んでいたでしょ…この女から解放
されたいつて…」

「違ひ…ボクのママはお前じゃない…この人だつ…リュウちゃんだ
けじやなくボクのママまで殺しやがつて…ヒートヒート…」

ボクは涙を流しながら訴えた。

それを聞いたリュウちゃんのママは突然、叫び出した。

「こやあああああああああああああ～っ」

ボクはびっくりして後ずたむ。

「ああああああああああああああああ…お前までわたしを裏切るのかああああ…ひーいいいいいい」

するとリコウちゃんのママは持つてたナイフを上にあげ、今にもボクを刺す体勢に入る。

「ああああああ…もつ駄田よ…良かれと思つてやつてるのに誰も認めてくれない信じてくれない…あんたを殺してわたしも…わたしも死ぬうう」

リコウちゃんのママはボクに向かって走つて来る。

「…………あ」

ボクはもう動く事は出来なかつた。

「逃げてっ！」

誰かの声が聞こえた瞬間、ボクの身体は乱暴に倒された。

「わっ」

ドサッ

「…………。」

「……お姉ちゃんー。」

ボクをかばってくれたのは一セナシキお姉ちゃんだった。

お姉ちゃんの脇腹にナイフが突き刺さっていた。

「お姉ちゃんー。」

ボクは大声で叫ぶ。

リュウちゃんのママは突然現れた女性にびっくりしていた。

「……やべ……逃げて……逃げるの……！」

「……でもっ」

「いいから……ホラー早く……早く逃げて……」

「ハ・うんー」

ボクはドアの入口に向かって走り出したが、リュウちゃんのママの方が一足早くドアに着きドアを閉めた。

「逃がさないわ」

ボクは周りを見渡した逃げ道は部屋の窓しかなかつた。

ボクは窓に近づく。

この窓からは隣のリュウちゃん家のベランダが見える。

「……もう逃げられないわよ……ココウーわたしと一緒に死ぬのよ……」

リュウちゃんとのママはジロジロと歩み寄る。

ボクは窓を開けた。

ガラガラ……

よく見ると窓の外側の壁に小さな地面の様なものがある。
これを辿れば隣のリュウちゃん家のベランダに着く。

だが、一歩間違えれば確実にここ6階から落ちて死ぬだろ？

「…………。」

選択の余地などないのでボクは窓をまたがり、外側に出た。

「あ・待ちなさい。」

ココウチヤとのママはボクを掴もつと手を延ばして来た。

ボクはそれをよける様に壁にへつたまま横歩きをする。

視界はいつも見慣れてるはずの高所だが、状況が違う為すこく恐い。

「危ない!落ちるわよ。」ひき戻つて来なさい。

ひゅ~ひゅ~。

こんな時に限つて風が強い。

「……は……は……」

「つゅづー危ないって言つてゐるでしょ!ひー。」

ボクは焦りながらも慎重に横歩きをした。

ふと、横を見るといこくわちやんのママも同じ様に横歩きをして追いつけてくる。

ひゅうひゅう

「…待ちなさい！ リュウー！」

「ボクはココに来んじゃない！」

ひゅうひゅう

隣のベランダが徐々に近づき、ボクはジャンプをした。

「えいっ

ボクの身体は宙に浮き、何とか着地出来た。

「……まあ……まあ……まあ……」

ボクはベランダの窓を開け中にへり、鍵を掛けた。

窓の向こうには、コロウちゃんのママが向かって立っている姿が見える。

「……まあ……まあ」

ふと、この部屋に変な臭いがあることに気付き、周りを見渡した。

そこにコロウちゃんが笑顔で立っていた。

「コロウちゃん?」

「あ、とボクをコロウちゃんだと悟った?」

「…え？」

「んふふ。」

嫌いな鼻笑いが聞こえる。

すると、リュウちゃんはみると大きくなり、髪が一気に伸びた
かと思えば見覚えのある姿になった。

ナツコである。

「最初からリュウの幽霊なんていないわよ。全部…わたしよ…んふ
ふ。」

「お前が？」

「…そりゃ…リュウは幽霊なんかつてないわ…あんなバカが幽霊
になると思つ…？」

「……お前は……幽霊なの……？」

「……まあ……」

「ドン。

背後から大きな音がした。

次にガラスの割れる音がした。

ガシャアアアアアーン

リュウちゃんのママが体当たりして割ったのだ。

「リュウウウウ——リュウウウウウ——！」

「うわっ」

ボクはびっくりする暇もなく両肩を掴まれた。

ガシッ！

「…一緒に死のう…」

「いやだ…リュウちゃんはとっくに死んだ！お前達が殺したんじゃ
ないか！」

ボクは突き放し、走り出そうとしたら足元を滑らせ地面に倒れ込ん
だ。

ドサッ

ベチャッ

そして生温い感触が全身に伝わる。

「何!?」

よく見ると地面は真っ赤に染まっていた。

「う…」

血をたどると奥の方にリコウちゃんのパパが倒れていた。

田は半開きにして見ていく。

「…あ…じさん?」

「!」の男も変な事いうの…リコウは死んだって…田の前にいるの…死んだって言つて…邪魔するから殺したわ…」

リコウちゃんのママは無表情でボクを見下ろしていた。

「…………。」

そしてやつくりとボクの首に手を近づけ、力を入れ始めた。

……ぐわわわわ…

「…………んっ」

ぐわわわわわわ

「んんんっ」

ボクは徐々に呼吸困難になつて行く。

体力は既に限界なので反抗する力も無かつた。

ぐわわわわわ

「……ん」

視界がぼやけ意識が無くなり掛けた。

その瞬間、リュウちゃんのママの姿は消え、別の女性の顔が現れた。

「キミ! 大丈夫?」

「ウオッホー! ゴッホー! ゴホゴホ……!」

咳込むボクの身体を起こし、その女性は口を開く。

「とにかく逃げるのよ……」

「……ゴホッ……! ?」

その女性はボクの体を支え、歩き出した。

043 ナツキ

ボクは突然現れたお姉ちゃんにあるホテルの一室に連れてこられた。

「…中に入つて」

「…うん…」

ボクは言われるままゆっくりと部屋に入る。部屋の中には子供がベッドで眠っていた。

「…………。」

「…ここに座つてて…ジュースでも持つてくるから…」

ボクはゆっくりとソファに座り込む。

ゆっくりと部屋を見渡す。部屋の様子からして今日チェックインしたようだ。

ボクは女人をジッと見つめた。彼女はボクの視線に気付き、

「…あ・じめん…わたしの名前まだ言つてなかつたよね?」

「ナツキお姉ちゃんでしょ?本物の…」

ボクの言葉に彼女は頷いた。

「もう一人のナツキお姉ちゃんはどうなつたの?」

ナツキお姉さんはボクにジュースを差し出しこを開く。

「…死んだわ…彼女はわたしの事件を担当した刑事さんの妹なの。ナオキを食い止めたいって言つたら喜んで協力してくれてね。でもこんな結果になるなんて…」

ナツキお姉ちゃんはテレビをつけた。

テレビではボクの学校で起きた事件が臨時ニュースで報道された。

犯人は『覚せい剤常習犯のバスの運転手』。

「結局…止められなかつたか……」

ナツキお姉ちゃんはタバコを取りだし火をつけた。

ボクはそれを見て言つ。

「タバコは身体に悪いよ?ママも世は吸つてたけどやめたんだ…」

「あ、ごめん。でも吸わないとモットイライラするの。」

「…………う。」

ボクは大粒の涙を流していた。

それに気付いたナツキお姉ちゃんはびっくりする。

「……どうしたの？」

「……ママ……死んじゃった……ママが……ひっく……ボク……ひとりになっちゃった……ひっく……うわああああさん……」

「…………。」

お姉ちゃんはボクをやさしく抱きしめた。

その温もりが心地良かつたが、今のボクにはママの温もりを想い出してしまつほど辛いものだった。

ボクはずっと泣いた。

涙が枯れるまで。

「ひっく…ボク…どうなつねやつだらう…ひっく…施設に行くハメになるのかな…？」

「…………かも知れないわね…」

「しうがないか…ママは死んだし…親戚のおじいさんおばさんばボクを絶対嫌がるし…」

「だったらお姉ちゃんのトマト来る…？」

「…え？」

「わたしは構わないわよ？」

ボクは一瞬、ものすいへ喜んだ。

だが、首を横に振る。

「ありがと。でも迷惑かけられない。自分で出来る事は自分でしたいし」

「そう?仕方ないわね」

「……それよつべビドヒ寝てこむのはお姉ちゃんの子供……?」

「…………ええ、そうよ

「結婚してゐるの?」

「……ううごシングルマーティー?」

「パパは誰?」

ナツキお姉ちゃんは何も言わず一ココと笑った。

「…………。」

ボクはその日ホテルに泊まり翌日、家に帰った。

ボクの家で起きた事件もテレビやマスコミに大きく取り上げられた。

犯人であるリュウちゃんのママは何故かリュウちゃんのお気に入り
だった公園の噴水場で水死体で発見された。

：原因不明の溺死だつたらしい。

そしてボクは結局、施設に預けられる事になった。

一体、ナツコやナオキって何だろう？

どんなに考えてもボクにはわかりそつもない。

知ってるのはボクとナツキお姉ちゃんだけ。

あの出来事すら、ボクの幻想だったのでは？ と思ってしまいます。

Hプローグ

そんなんある口の事。

「脱走していた女が見つかって戻つて来るらしい。」

「…見つかったのか？今日は時間かかったなあ」

施設の先生達の会話が聞こえる。

「脱走？」

ボクが呟くと、先生はボクを見た。

「そうか、誠一郎くんは知らないんだよね？よくここを脱走する人がいてね。…確かに、病院で飛び降り自殺未遂を起こして命は助かつたんだけど、頭がヤラれちゃって…それ以来、ずっとここにいる。」

「…ふうん。」

「おっ…来た来た。おかえりいいい」

先生は奥からやつて来た女人の元へ。

「……あれ？」

ボクは田を凝らして、女人を見た。

「……お姉ちゃん？」

そこにいるのは、あの時、ボクをホテルへ連れて行った人。

「あれ？何で知ってるの？」

もう一人の先生が言つ。

「！」の前…会つたんだもん。お姉ちゃんも…障害者なの？」

「ああ、障害者だ。虚言癖もあるから彼女が言つた事は信じない方がいい。」

「……え？…あ…赤ちゃんは…？子供いなかつた？」

「子供はいない。だが、脱走する度、何処から赤ん坊をさらつて自分の子供だと叫ぶ。」

「……え？……なんで？……意味がわからない……」

ボクはお姉ちゃんの元へ駆け寄った。

「お姉ちゃん！ボクだよ？覚えてる？..」

ナツキお姉ちゃんはボクを見て微笑む。

「あいり。先日はねー も。」

「やつぱつナツキお姉ちゃんだよね？」

「アリよ？わたしはナツキよ？」

「でも……なんか……

……おかしい……

「誠一郎くん！残念ながら彼女の名前はナツキじゃないんだよ？」

「え？……だつてナツキってこの前……」

「会った事あるのかい？……じゃあ、よく見とこて。」

先生は笑うとナツキお姉ちゃんに向かって

「久しぶり、サチコちゃん。」

「あー…ひやしひやしひやしひ。わたしの事覚えていてくれたんだあ？」

「何處に行つてたんだい？」「サチコー。」

「「」みんなさい。友達と映画に行つたら」「こんな時間に…怒つてるへ。」

ナツキお姉ちゃんは先生の言葉に合わせ、全然違う事を言つていた。

「どうこう事?..」

ボクの問いかけに先生は言へ。

「彼女は人に会わせて嘘の返事をこいつ障害者なんだ。本当の名前は『ナオミ』だ。」

「…ナ…ナオミ…」

ボクが叫ぶと、お姉ちゃんはボクを見て

「セツ！わたしあナオミー宜しくね！」

と、返事をした。

「…………！」

ボクは言葉に詰まつた。

じゃあ…

あれはなんだつたんだ？

何故、彼女はあの場所にいてボクを助けたの？

「…………。」

そりが。

ナオキの仕業か。

彼女をナツキお姉ちゃんと思わせて…まだボクを狙つてる？

それしか考えられない。

「誠一郎くん…もうそろ寝る時間だよ、部屋に戻りや。」

「…先生…ボク…殺されちゃう…」

「突然、何を言つてるんだ…?」
「は施設だよ? そんな事あるはず
かない!」

「本当なんですか…ボクはナオキって奴に命を狙われています…」

「ナオキ? 誰だねそれは? キハ何か怖い夢でも見たんじゃないの
か?」

「違う…本当なんですか…先生…ボクを助けて…」

「落ち着きなさい…とにかく消灯時間だ。ベッドへ行け。」

「やだつ…殺されちゃう…」

「落ち着きなさい…誠一郎くん…」

「やだつ…」

だが、ボクは強引に先生に引っ張られ自分の部屋へ連れて来られた。

「 セリ、寝なセー」

「 やだつ」

先生は手を出しから注射器を出す。

「 良い子にするんだつー! ?

「 はあつ…まさか? …はつ…お前も仲間だな? 一セナオキみたいに

つ

「 何を言つてるんだ? 落ち着かないなら打つぞ? 」

「いやだつー! ボクは騙されないぞつー! 」

「 いい加減にしないかつ」

「 ……はあつ…はあつ」

先生はボクを怖い目で見る。

そしてふと気付くのだ。

先生の後ろにナツキ…いやナオミ! もの姉ちゃんがいる事に…。

「…………。」

「よしひ……静かになつたな?良い子だ…」

ガニッ

「くぐり…」

先生はお姉ちやんに鈍器なよつなもので殴られ地面に倒れ込む。

アナッ。

「…………せあつ…………せあつ」

ナガミ!お姉ちやんはボクをめりへつ見つめる。

「あ……あつがとい。また助けてくれたんだね?」

「…………わうね。あなたを助ける為だもの。」

「…とにかく逃げなきゃ」

「…その必要はない。」

「一え？」

彼女は笑うと、

先生を殴った鈍器を持ち上げ、ボクに振りかざした。

「え？」

「コンツ。

「…」れもナオキ様のため…」

…end

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256b/>

Lonely Plan et

2010年10月19日22時16分発行